
starlight symphony

みかん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

st ar l i g h t s y m p h o n y

【Nコード】

N 4 3 6 0 T

【作者名】

みかん

【あらすじ】

“虹の彼方へ” 1万アクセス突破記念に投稿します。

と言っても、虹の彼方への改訂版なので、根本的なストーリーはさほど変わっておりません（「」*）

一部の名前の変更アリ。

ところどころ、パワーアップさせて頂いておりますm(――)m

前作よりも、恋愛要素プラスSF要素をより入れられたらと思って
おります。

妃杏（妃音）を取り巻く、如月・神楽・璃音（乃亜）・琉雅とのそ
れぞれのエピソードも少し加えております。

虹の彼方へを既読の方も、そうでない方も、よろしければ、ご意見
ご感想お願い致します（＾・＾）ノ

神崎妃音、16歳。

神崎家の養女として幸せに暮らす彼女の日常が、ある日突然急変す
る。

今まで一度も浮かんだコトのない光景がアタマに突然浮かんだり、
家族友人知人、誰にも見えなかったハズの彼女が肌身離さず身に付
けているペンダントが見える人物が現れたり、

どこからともなく彼女を呼ぶ声が聞こえたり…

ワケのわからないトラブルに巻き込まれたり…

翻弄され、困惑する彼女に訪れた衝撃の真実とは・・・！？

いつか見た夢

それは今から約200年以上の未来のお話。

地球以外の惑星にも人が住める惑星が出始め、いつしか“宇宙”が“宇宙”と言う概念を無くし、

惑星が1つの“国”と言う分類になっている時代――

ある1つの惑星、“琉按星”と言う、環境はまるで地球と瓜二つの惑星がある。

その皇女、

琉按妃音（るあん ひのん）が、

この物語の主人公。

この皇女様、

生まれながらにしての、

“次期皇位後継者”。

ちなみに現在、若干2歳。

この琉按星は、惑星内にある、惑星の守護山である“プラチナムマウンテン”と言う名の、この惑星独特の天然石で出来た山の力によって平和が保たれている。

それ故、この山の力はこの惑星にとって、

“絶対”

なのである。

なので、代々、この惑星のシンボルとも言える“長”、つまり“皇”は、この山の力によって導かれた皇家の者になるしきたりになっている。

妃音はその皇家に生まれた1人。

皇家に生まれた者であっても、出生の瞬間にプラチナムマウンテンが眩い光を放ち、

そこから天然石の“プラチナムストーン”が放出されて、

生まれたばかりの赤ん坊の元にプラチナムストーンが無数の光と共に現れた者でなければ、後継者として認められない。

妃音はその“認められし”皇女なのである。わずか2歳にして認められたる才能を発揮していて、

後継者としての公務はもちろん、数種類の楽器・あらゆる言語の日常会話をこなす。

また、皇妃である妃音の母親から

“アナタは人の為にいるのです。まずは人の為に行動しなさい”

と叩き込まれて育っているせいもあり、

とある皇家主催のセレモニーの際、

皇邸の中庭で招待者の子供達が各々遊んでいた時、

ある1人の男児が階段から足を滑らせてハデに転んでしまい、出血してしまつと言うアクシデントがあったコトがある。

そんな時でさえ母からの教えを忠実に守った妃音は、

慌てたり、泣き出したり、狼狽える周りの子供達や

対応に苦慮する大人達（妃音のSP エージェントと呼ぶ）をヨソに、

妃音は1人、何1つ怯むコトなく毅然とした態度で、

冷静かつ適切に、時にエージェントや周りの子供達に指示を出しながら、迅速に応急処置をし始めた。

処置が終わった後も、念のためと、邸内にいる大人達に一切気付かれるコトなく皇家主属の病院に妃音が連れていき、事なきを得たと言うエピソードがある。

若干2歳にして、である。

また、天文学に対して大変興味があり、空を眺めるのが大好きで、コトあるごとに1人外に出て、空を眺めたり、

エージェントを引き連れて“宇宙散歩”によく行くと言う。

ところが、妃音の3歳の誕生日のセレモニーの日、

妃音のみならず、琉按星の問題とも言える大事件が起きてしまう。

ソレがこの物語のきっかけともなってしまう、

【次期後継者失踪】

と言う、

前代未聞の一大事を引き起こしてしまう・・・

犯人も原因も、誰にも解らなかった。

妃音がいなくなる直前まで一緒にいたエージェントまで誰１人として残っていなかったからだ。

証言者が誰もおらず、てがかりも何も残っておらず、搜索は難航し、説明が不可能とまで言われた。

初めの数年は、妃音が当時３歳と言うコトもあり、何とか国民の目を欺けられたが、

さすがにいつまでもごまかせるワケもなく、

皇女失踪事件は次第に全国民が知るトコロとなる。

そうになると、ロイヤルセントラルセクション、通称RCS（↑全ての官庁の全集合体のような機関）は、威信にかけて全勢力を搜索に注ぎ込んだ。

それでも数年経っても成果は無かったが、

ある日突然、プラチナムマウンテンが何かを示すかのように反応するようになり、

何度か繰り返すうちに、この反応は妃音のストーンとのシンクロだと言う仮定に辿り着いた。

その仮定を提唱し、シンクロを利用して妃音の居場所を突き止めるシステムを開発し、見事に妃音の居場所を突き止めたエージェント、

なるのが琉按星イチ難しいと言われるエージェント史上で唯一の“オールパーフェクト男”

別名“伝説のエージェント”

カグラ
神楽と、

その神楽を教育係に持つ、新人エージェントの

キサラキ
如月

妃音を含めたこの3人が、この物語のメインキャラクターである。

エージェントになるには、2年間の養成機関“アカデミア”に“入関（入学）”し、2年間毎月行われる試験にクリアし続け、

なおかつ“退関（卒業）”試験もクリアしなければRCSに入庁（入官）出来ない。

また、入官し、エージェントになれてもなお年に2度行われる試験に落ちてしまうと即クビと言う厳しすぎる条件の中、

神楽は入関試験から現在に至るまで、全てパーフェクトでクリアしている。

“伝説のエージェント”たる所以である。

ある日のRCS――

この日神楽はRCSの最高責任者であるBOSSコト“スザク朱雀”の元を訪ねていた。

“伝説のエージェント”である神楽は、入官3年目にしてBOSSのサブを打診され続けているのだが、一向に受け入れないでいた。

それどころか、あるうことか神楽より年下であり、今は失踪している妃音の搜索に携わりたいと、現場から離れたくないと懇願しているのだ。

神楽は入官試験の時から“妃音様にお仕えしたい”とばかり言い続けてきた。

それだけでもBOSSには理解し難いコトだと言っのに、またしても神楽はBOSSに理解し難いコトを言い出していた。

BOSSの様子は驚愕そのものだった。

“『恐らく新入官してくる如月をワタクシにお預け願えませんでしょうか』”

青天の霹靂だった。

普段余り人と接しない、コトバ足らずで不器用な神楽が自ら教育係を申し出る等、想像の範囲を越えていたからだ。

『神楽、ホンキか？』

思わず出てしまったホンネだった。

最高責任者たるもの、多少のコトでは動じないのだが、さすがにコレは動じずにはいらなかった。

「はい。如月はプログラムに長けていると聞きました。是非とも如月の力が必要なんです。」

真剣に、ジッとBOSSの目を見て言う神楽。

『神楽ともあろうエージェントが人の力を借りるなんて、相当苦慮しているのか？』

BOSSは神楽に絶対の信頼を寄せていた。

何とか神楽にサブを任せたいと思う程に。

「いえ、面白そうだなと思ひまして。」

こんなセリフも、真剣に言う神楽。

ある程度神楽の性格を把握している自信のあるBOSSは、敢えてそれ以上は聞かずに承諾した。

驚愕したのは入官してから教育係が神楽だと知らされた如月もまた、同じだった…。

『どうしようオレえ…。自信無くすよな、“あの”神楽サンがチーフなんて。正エージェントになれんのかなあ。』

今年のアカデミア主席退閑の如月をもつてしても、神楽が教育係と言うのは悩みのタネでしかなかった。

と言うのも、神楽のウワサは当然アカデミアでも有名で、

“冷静沈着、ハガネのオトコ、氷のような冷静さ”

など、プラスなイメージが神楽に対してなかった。

もちろん、神楽が自ら如月の教育係を志願したコトは、神楽とBOSSだけの秘密、如月は知る由もない。

不器用な神楽のコト、如月に知られたくないと、BOSSに懇願したのだ。

そうとは知らずに、如月は実務前から憂鬱で仕方なかった。

ところがいざ神楽の下に付くと、驚くほどにイメージは一新された。

“冷静沈着”なのはウワサ通りだったが、コトバ足らずで不器用な為に誤解を受けやすいが故の“ハガネのオトコ、氷のような冷静さ”であるコトに次第に気づいてきた。

だが如月、プライドの高さ故、度々暴走する傾向にあり、その度に神楽に厳しく批判されていると言う欠点がある。

「如月、コレを頼む」

『ハイ！チーフ！！』

だが神楽は如月のプログラムの能力の高さには一目置いており、朱雀から如月のプライドの高さを指摘されていたがソレを承知で教育係を買って出ていた。

神楽も部下と言うよりは、どちらかと言うとアシスタント的な関係で如月と接していたのだった。

神楽は確信していた。

“神楽と自分の力が融合すれば、妃音様の居場所を突き止められるハズだ”と。

神楽には、“プラチナムマウンテンの反応は妃音様のプラチナムストーンとのシンクロによるものだ”と言う確固たる自信があった。

神楽は自分で突き止めたいと言う強固な思いを持って入官した。

それ故に、今回の“如月との合同プロジェクト”には並々ならぬ想いがあつた。

完成した今、神楽は今すぐにでも自分がこのシステムを使って妃音の元へと行きたかつた。

『チーフ、出来ました！！』

満面の笑顔の如月視線の先には、安堵の表情の神楽がいた。

普段は無表情で、自分に滅多に見せない神楽の表情に、言い様のない充実感を感じる如月。

「ご苦労様。じゃ、オマエが行ってこい。オレはまだやるコトがある。」

不器用な神楽は如月に目を向けず、自分の表情も1つも変えずに如月に告げた。

『え、つつつ！？』

如月は一瞬コトバを失った。

妃音様発見まであと僅か。

如月もこのプログラムの立ち上げに参加してきて、このシステムがかなりの性能があるコトには気付いていた。

これなら間違いなく妃音様の居場所を突き止められるハズ。

如月も確信していた。

確かにこのプログラムを仕上げたのは自分だ。

かと言っても、神楽がデザインしたシステムをプログラムしただけだ。

しかも神楽は自分の上司。

ましてや自分はまだ研修の身。

しかも自分の欠点を知ってるハズの神楽が自分にこんな大役を…。

『もしかして実験台…ですか？』

余りの困惑っぷりに、出たコトバがあるうことがコレだった。

ひきつる如月。

神楽は失笑しただけで何も返さなかった。

『ありがとうございます。行つて参ります。』

「頼んだぞ。」

深々とアタマを下げる如月に、ただ一言だけ交わし如月を見送った。

如月には見せなかったが、神楽の表情は温かく、優しい笑顔だった。

『イイのか？ 妃音様の居場所を突き止めるのはお前の悲願なんじゃないのか？』

神楽と如月の様子を自室でモニタリングしていた朱雀がモニター越しに神楽に問いかけた。

神楽は朱雀に目を向けずにただ微笑むだけだった。

in my future

“「妃音、アナタは人の為に行動しなさい。ソレがアナタの使命なのですよ」”

また“あの”夢を見た。

稀に見る夢。

いや、コレは“夢”なんだろうか…。

幼い頃の記憶が甦っているだけなんじゃないだろうか…。

この“夢”を見た翌朝はどこか気分が堕ちてしまう。

神崎妃音、16歳。

神崎家に来るまでは、児童養護施設にいたんだけど、

自分がどうして施設にいるようなコトになったのか、

親がどこにいるのか、

身内はいないのか、

自分がどうして1人だったのか、

全く憶えていなかったらしい。

さすがに3歳の時のコトだから、もちろん今でも全く思い出せない。

自分の名前と誕生日ダケしか憶えてなくて、婦警さんや保護司さん、施設の先生達を困らせたコトは記憶の片隅に憶えている。

“ 重度の心的障害によるストレスからくる記憶障害 ”

だそうで。

ところがアタシの “ 謎 ” は、それだけに留まらなかった。

“ 「何か手掛かりになるものはないかしら」 ”

と困窮するオトナ達にアタシは自分の身に付けていた石のペンダントを見せた。

とにかく大事なモノだってコトは憶えていた。

“ 「コレは命と同じくらいアナタにとって大切なものです。御守りのようなモノです。大事にするんですよ。」 ”

そう厳しく言われてきたコトはなぜか3歳にして、記憶に焼き付いていた。

のに、

“ 「何？」 ”

オトナ達にはペンダントが見えていなかったようで、怪訝な顔をさ

れてしまったのだ。

その時アタシは幼心に、瞬間的に気付いてしまった。

“アタシ以外には見えないんだ”

って。

実際、神崎家のパパママにも見えないみたいで。

一度も外したコトのないペンダントは、学校でも誰にも突っ込まれたコトが無かった。

．．．．．“謎”はまだまだあって、

このペンダント、アタシの成長と共にサイズも大きくなっていくから、ホントに一度も外したコトがない。

それに気付いた時、またしてもアタシは察してしまった。

“それだけこのペンダントがアタシにとって大切なモノであるコトは間違いないんだ。”

って。

だから、驚く程このペンダントに対して“気味悪さ”や、“恐怖心”、“違和感”、“疎ましさ”は、微塵も無かった。

自分でもなぜだかイマイチ良く分からないんだケド。

とにかく“大事なモノ”・“御守り”って言う認識が強くて。

「おはよう妃音。」

毎朝駅前で親友の乃亜^{のあ}と合流。

『おはよう乃亜。』

乃亜とは幼稚園からの付き合い。

施設の出だってコトで、冷やかしたり好奇の目で見る人達が多い中で、乃亜はそんな人達の目を一切気にするコトなくアタシに接してくれた。

アタシもアタシで、そういうのを誰に対しても全く気にせず接してて。

何言われても

“人の為に行動”

って言われてたのが大きくて。

家族のコトは何も憶えてないってのに、お母さん（だと思っ）に
言われてきた、

“ペンダントは命と同じくらい大事”ってのと、

この、度々の夢（？）にも出てくるコトバの2つは焼き付いてるんだ。

「また見たの!？」

怪訝そうな乃亜。

乃亜は、今では朝のアタシのテンションで“あの夢”を見たかどうかかってしまう。

何も言わず、ただ頷く。

「最近ペース速くない？」

確かに。

乃亜の言う通りだった。

今までは年に数回、まさに“忘れた頃に”ってくらいだった。

それが、最近月イチ〜月2くらいで現れるようになった。

アタシの機嫌で乃亜が気付くようになったのも、そのせいだ。

「で、進展は？」

『全く無し。毎度同じ。』

頂垂れたまま。

「やっぱり妃音は相当のお嬢様だと思うよ?」

乃亜は決まってそう言う。

アタシも決まってこう言い返す。

「んなワケないでしょ? だったらすぐに爺やあたりが迎えに来るよ。」

呆れ爆裂で。

「お嬢様なりの何かワケがあるかもよ。だって3歳でピアノの数カ国語だの出来ないよ? フツー。」

いつも乃亜はコレを持ち出す。

正直、恥ずかしい…。

でもコレは、ホントの話。。。

施設で初めてエレクトーン弾いた時の先生達の驚きたるや…。

さすがに手についたモノは、記憶が無くなってもカラダが憶えてたんだね。

ますますアタシの素性が謎に包まれてしまったのは、言うまでもない。

しかもあの2つのコトバと同じで、英会話もカラダに染み着いてたみたいで、日常会話程度なら英・中・韓・仏・西・独が出来ちゃっ

て…。

もちろん自分的には当たり前のように話したから、ピアノもそうだけれどどうして周りの人達が驚いているのかわからなかった。

小学校に入った辺りで、ようやく自分の特異さに気付いたっけ。

神崎家に養子に入れたのは、ピアノのお陰だった。

神崎パパも神崎ママも、音楽家。

だから、施設でアタシがエレクトーンを弾いてるのを見て、一目惚れしたんだって。

何とも有難い話。

と言っても、アタシは至ってフツートの女子高生。

行ってる学校も、音楽科じゃなくて特進科。

ピアノは続けてるけどね。

『もしお嬢だったにしても、今のアタシは神崎妃音だよ。それでイイよ。』

アタシのココロからのホンネだった。

「そっか。」

乃亜もただ微笑みながら頷いていた。

まあ、逢えるモノなら一度でいいから逢って見たい気はするけどさ……。

あの夢を見た朝、パパママの前では頑張って普段通りを装ってるよ。

さすがに「どうしたの？」とは聞かれるけど、

すかさず「『寝不足かも』」って、笑顔で答えて。

“言えない”ワケでは、ナイ。

パパもママも、

“もしもこの先いつか突然本当のご両親が現れたとしたら、その時は妃音が嫁に行ったと思うから、遠慮なくご両親のトコロに行つていいんだよ”

って言ってくれてる。

だから遠慮する気はない。

今さら行く気もないダケ。

まあ、あくまでも現れればの話だけだね。

あくまでも……。

今日は満月！！

アタシにとって、何よりも大事な日♪

星空マニア（自称）のアタシには、何にも代えがたい、たまらなくテンションが上がる日。

ただでさえ、夜星空を眺めるのが何よりも大好きだけど、

満月、

しかも晴れてる日は一番堪らない！

ここまで上がる理由は、アタシの身に付けている“あの”ペンダントにあるの。

このペンダントの石、うつすら青みがかった透明のクリアの石なんだけど、月の光に照らされると、何とも神秘的な輝きを放つんだよね。

普段から、コトあるごとにベランダに出ては星空を眺めてる。

小さい頃からずっと星空を眺めるのが好きなんだ。

施設にいた時も春夏秋冬構わず、夜、1人で庭に出て何時間もただひたすら星空を見ていたらしい。

“「妃音はお空から来たのかな」”

なんて、何とも子供騙しな、なおかつファンタジックでメルヘンチックなコト言われてたっけ。

“お空から来た”

まんざらでもナイのかな、なんて、

この石を見てると思っちゃう。

今日はバイト。

週2程度で、駅前のスーパーで品出ししてる。

“「いくら週2とは言え修南の副会長がバイトなんて……」”

って、イヤミなのかからかってんのか解ないけど、バイト仲間によく言われる。

“修南”ってのは、アタシや乃亜が通う中高一貫校。

“文武両道”がモットーの学校で、アタシは特進科、乃亜は体育科。

僭越ながらアタシ、生徒会副会長なんです…。

“学年トップが役員やらないでどうするの？”

と、嫌がるアタシを完全無視で、無理矢理立候補させられたら副会長になっちゃって…。

バイトはその前からやってたんだけどね。

今日みたいな日はホントはバイトどころじゃないんだけどねっ。

『おはようございまあゝす！』

出勤すると、すかさずチーフに呼び止められた。

「おう神崎！」

チーフの後に1人の男の人が立っていた。

「昨日から入ったアルバイト。」

アタシと同じくらい、もしくはちょっと上と思われる、背の高い男の人。

『神崎です。よろしくお願いします。』

「南山です。よろしくー！」

うわっ！

何と爽やかな…。

“キラリ〜ン”なんて音が聴こえそうな眩しさすら感じる…。

「昨日は余り実際の業務をしてないから、神崎、教えてやってくれ。」

『はい!』

たかだか週2のアタシが教えてイイのか?…。

「よろしくお願いします」

笑顔まで眩しいよ。

教えるったって、簡単な作業だけだね。

「神崎サンのそのネックレス、キレイだね。」

!!!!!!!!!!!!!!

何iiiiiiiiiiiiii??

思わず顔が歪む。

『みみみみ…、』

動揺し過ぎてコトバが出ない。

今、言ったよね、確かに。

南山サン、“そのネックレス”って…。

段ボールを持つ手が止まったまま。

「何て石？」

屈託なく問い掛けてくる南山サン。

『見えるんですか？』

声まで裏返る。

「えっ？」

不思議そうな表情の南山サン。

『えっ、あつ…。．．．ありがとうございます。名前は…』

“ 分かりません ” って言い掛けたとき、館内放送がなった。

“ 「 アルバイトの神崎サン、カウンターまでお願いします。 」 ”

『 すいません行ってきます。 コレ、お願いします。 』

忙しい時とか、カウンター業務をお手伝いする時もあった。

主には配送の受付とかラッピング。

持っていた段ボールを南山サンに渡し、カウンターへ急いだ。

それにしても…。

このペンダントが見える人がいたなんて…。

かなり衝撃的。

南山サンで、何か力持ってたのかなあ。

「 神崎サン、上がり? 」

バイトは21時まで。

上がろうとしていたら、南山サンに声を掛けられた。

『ハイ。』

何故かちよつとドキッとしちゃう。

「時間ある?」

へっ?・・・。

言われ慣れないコトバに、顔がひきつる。

珍しく心拍数急上昇。

しかもアタシの心拍数に合わせるかのようにペンダントが点滅し始めた。

何・・・、コレ・・・・・・・・

アタシ、パニックのあまりフリーズ。

「どうかした?」

えっ???点滅は見てないの!?

何気ない様子の南山サン、アタシの状態が不思議みただ。

どうしよう。。

イヤな胸騒ぎがする。

「外で待ってるね。」

えっ・・・？

ウソ。。。。

どうしよう。

この胸騒ぎが、良くないコトを暗示してる気がしてならない。

断る？

何て言ってる？

どうしよう。

しばらくアタシはロッカーから出れなかった。

早く帰って満月を・・・、

！！！！！！！！そうだよっ！！

満月が待ってるから早く帰らなきゃ。

あっ、、、

点滅が収まっている。。

胸騒ぎも収まってる。

申し訳ないけど、お断りしよう。

時間も時間だしねっ。

店を出てすぐ、空を見上げた。

ハンパなくたまらない景色!!

何時間でもこのまま上を見ていたい気分。

あれ????

南山サンがいない…。

帰っちゃったのかなあ…。

待たせ過ぎたかな。

よし! 帰っちゃえ!!

何て薄情なアタシ。

何てったって今夜は満月だもの。

何よりも満月が優先だよ。

こんな夜はピアノがキレイなバラードかクラシックを聴きながら帰る。

“ 妃音はお空から来たのかな ”

なんてコトバが甦りつつ。

【妃音…】

．．．、．．．、ん???

何???今の…。

誰か呼んだ?

立ち止まり周りをキョロキョロ見渡す。

誰もいない、、よねえ。

何だ!?

だって音楽だって、ヘッドホンで結構な音量で聴いてんだよ?

何なんだ?

って、

石が光ってるううう!!!

何コレえええ→→→!!!

まただよ…。

月の光に照らしてないのに勝手に光ってる。

しかも見たコトのない色。

しかも点滅。。。。

でも何だろう、さっきとは違って、ヤケに落ち着く。

胸騒ぎもないし。

今の声、驚きの余りに良く覚えてないけど、何故か落ち着く。

石はまだ点滅してる。

ドキドキとか、全然してない。

ゆっくり歩き出す。

【妃音…。】

まただつつつ!!

、 、 、 、 、

この声、もしかして・・・

“あの夢”に出てくる声と同じかも…。

お母・・・さん？

な、…の？？

ふと石に目をやる。

依然として石は点滅したまま。

いつも光に照らされる石の輝きより、何万倍も癒される。

アタシはハッとして満月を見上げた。

良く分かんないけど、コレは満月の力なのかなって、

何の根拠もないけど、

そう思える。

だからってどうなの？って思うけど、

アタシ、ホントに空から来てたりしてっ！

いや、

・・・アタシ、そんなキャラじゃないだろ。

んな非現実な…。

家に着く頃には、石の点滅もアタシを呼ぶ声も無くなっていた。

何だったんだろう。

あの夢のコト、考え過ぎちゃったかなあ。

パパママの前では、あくまでも平静を装って。

キッチンで満月鑑賞には欠かさないココアを準備。

満月満月うゝ

ほんと、テンション上がるわあ→→→

って、……………何、今の…。

ほんの僅か一瞬タケだけど、ある風景が突然アタシの脳裏を過った。

見たコトない景色。

赤レンガみたいな造りの建物。

結構なお屋敷。

庭と思われる、芝生が敷かれたところには、色とりどりの花が咲き乱れていて。

まるでマンガに出てきそうな宮殿みたいな…。

ん？ケータイが光ってる。

部屋のテーブルの上のケータイを手取る。

乃亜からのメールだ。

“ 星空見上げすぎて風邪引くなよ！”

プッ！

思わず微笑む。

満月の夜は、乃亜から何かしらの“ 勧告” のメールがくる。

“ 首のむち打ちに注意！！”

とか、

“ベランダで寝るなよ！”

等々…。

乃亜に返信していざベランダへ。

窓の縁に座って、ココアを飲みながら空を見上げる。

やっぱり落ち着く。

何とも言い難いわぁ。

ペンダントを月に照らす。

神秘的な光。

それまでに何かトラブルとかがあったとしても、この光を見ると、スーッと消えちゃう。

ソレがこの石の力なのかなって思う。

“御守り”だから…。

部屋でもBGMは同じくピアノのキレイなクラシックか、バラード。

何でムーディーなんだろう…。

【妃音…】

え
つつつつ
!!!!!!

まただよお
→

でも今度は男の人の声だ。

ってコトはお父さん!?!?..。

ちよつとドキドキしてる。

ペンダントがまた点滅してる。

何なんだ、
ドコから声があるんだ？？？

いないと分かっている、つついっつい周りを見渡しちゃうよ。

ペンダントはただ点滅してるだけ。

何なんだ???

もしかしたらもしかしてなの？

お父さんとお母さんなの？

ダメだ、お父さんのコトもお母さんのコトも全く思い出せないよ。

ペンダントに向かって話し掛けてもムダなのは分かってるけど、問い掛けずにはいられなかった。

“お父さんとお母さんなの？”

って。

うゝあゝ ああああ → → → → → → → → →

石が激しく点滅してるよ!!!

フラッシュみたい。

しかも代わる代わるいろんな色に…。

さすがにこれには心臓がドキドキしちゃうよ。

まさかアタシの問い掛けに答えてる？

そんなワケはナイのだけれど…。

なゝっゝっゝっゝっゝ

アタマが痛い。いいいいいい。

“ズン！”

って音がしそつなくらいに重くなつたかと思つたら次の瞬間に激痛が…。

何だつてのよ今日は一体！！

押し潰されそつなくらいの重さのある痛み。

えっ？？？

さっきのお屋敷の風景がまた浮かんできた。

何でこんな時に？

痛すぎるよおおおお…。

ママあ、パパあ…。

え…？？？

か、ゝ、

カラダが、

動かせない・・・。

痛みのせい？

いや、手すら動かないよ？

すぐ手元にあるケータイが届かない。

取れない。

流れてるハズのBGMも全然聴こえない。

かなりの静寂。

【妃音…】

またこの声。

やっぱり答えなの？

この声はお母さんの声なの？

痛みが消えた。

と思ったら「よ」「...」。

ベランダにいたハズなのに、辺り一面真っ白。

あ
あ
あ
！！！！！！！！！！

この光景、
“あの夢”
の時と同じだ。

【妃音様！】

h
h
h
?

妃音
“ 様 ”
あ
？
？

まさか、ホントにアタシお嬢だったのお???

って、この声はどこからするの？

周りを見渡す。

「つてか、そもそもここドコなのよ!!!」

【妃音様であられますか？】

だからドコから聞こえ・・・

うあああ→→→→

驚きのあまり声が出なかった。

顔が尋常じゃなく強張る。

だって、さっきまで誰の姿も無かったのに、振り返ったらいきなり男の人がいたんだもん。

ビククリするよー！

心拍数速くなってる。

しかも妃音“様であられますか？”って…。

えっ？？？

男の人は突然アタシに向かって片足を跪いた。

コレって、良く映画とかで見るよ？

王様とかの前に家来が現れた時とか、男性が女性に対してダンスを申し込む時とか…。

で、何でアタシに？

『あのおおお…』

声が震える。

「申し遅れまして大変申し訳ありません！ワタクシ、RCSから参りました、新人エージェントの如月と申します。大変長い間お待ち致しましたが、妃音様をお迎えに参りました。」

1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	8												

フリーズするコト数分…。

「妃音様？」

怪訝そうな如月サン。

RCSってナニ？？？

エージェントってナニ？？？？？

お迎えって、どこから?????

そして、ココはドコ????

全く以て、ちんぷんかんぷん。

今のアタシの頭上には、無数のハテナが散乱してると思っんだ。

ただ、ひたすらフリーズ。

「妃音様？」

如月サンの表情も、怪訝そうなまま。

ただボー然と立ち尽くすしか出来ないアタシ。

「憶えていらつしゃらないのですか？」

『はいい…。』

力が出ない。

「うわああ…。チーフが言ってた通りか…。そっかあああ。」

『如月サン?。』

かなりの落胆っぷりの如月サンに、アタシは声を掛けずにいられな

アタシのコトバに、如月さんの表情が急に、あからさまに怖くなった。

「2人目…？とおっしゃいましたか？」

まるで確認するかのようになり、如月サンはゆっくり聞き返した。

『ハイ…』

「ちょっと失礼致します！」

アタシの返事を確認するや否や、慌てた様子で如月サンは何やら自分の首に付けてあるペンダントのようなモノに向かって、何やら話し始めた。

何アレ…。

マイク付？

今時トランシーバー…？？？

それともインカムとか無線的なアイテム…？？

何を話してるかはイマイチ聞き取れないしさっぱり意味不明。

だけど、如月サンがやたら焦ってるのはわかる。

会話の相手はさっきチラッと出てきた“チーフ”って人かな。

会話が終わると、如月サンは自分が付けているクリスタルの水晶つばいブレスレットを外してアタシに付けた。

いや、

外したって言うよりは、ただ引つ張ったダケだ。

「失礼致します。」

えっ！?!?!?!?!?!?

アタシに付けるにもただアタシの手首に乗せたダケだよ？

何じゃコリヤ…。

アタシ、ボー然。

「いくら緊急事態とは言え、恐れ多くも妃音様ともあろう御方にワタクシなんかので代用して頂くなど、甚だ心外だとは存じますが、今回妃音様の“波”を正しくサーチ出来なかったのは、恐らく何らかの邪波のせいだと思われるので、邪波避けの為にしばしの間、コレをお付け下さい。」

………アタシの頭上には、今一体どれだけのハテナ分子が散乱してるんだろう…。

何一つ理解不能。

ダメだ、ワケが分からなすぎるワ。

耐えきれず、アタシはその場にしゃがみこんだ。

「妃音様？」

慌てる如月サン。

『大丈夫です。“様”って、ヤメて下さい。』

顔を上げると、困り果てた表情の如月サンが目の前にいた。

アレっ??

アタシは、如月サンの着ていたツナギのような服の胸元のエンブレムみたいなモノに目が行ってしまった。

「何を仰るんですか！！妃音様こそワタクシのようなモノにそのような御言葉おヤメ下さい。」

必死な如月サンをヨソに、エンブレムに釘付けのアタシ。

「妃音様?…」

如月サンは気付いたみたいだ。

『そのエンブレム…。』

アタシが施設に連れていかれた時に着ていた服に付いていたエンブレムと同じだった。

ただのデザインかと思っていた。

「あつ！！お分かりですか！？」

心なしか嬉しそうな如月サン。

「コレは皇家の証です。その皇家に仕えるモノとして、我々エージエントも同じモノを賜っております。」

“ 皇家の証 ”

皇家？

その時“ あの ” 光景がまた甦った。

赤レンガの、宮殿みたいなお屋敷。

乃亜の、口癖とも言つべきあのセリフも。

「やっぱり妃音はどっかのお嬢なんだよ」

アタマの中、ぐっちやぐっちや。

落ちて着かせようと思っても全然落ちて着かせられない。

深い溜め息と、深呼吸の繰り返し。

「お座り下さい。」

そう言う、いつの間にかアタシの背後にソファアが現れた。

え え え え ? ? ? ? ?

アゴが外れそうな程驚く。

ソファーを見つめてフリーズ。

「ちゃんと座れますからご安心下さい。」

この人、マジシャン???

ツナギ着てるし…。

アタシ、有名なマジシャンの娘？

半信半疑のまま、恐る恐る腰掛けてみる。

・
・
・
座れた。

しかも尋常じゃない程に心地好い。

ウォータークッション????

低反発・・・じゃあないよね？

なんて悠長なコトを感じてるヒマは無かった。

『ココ、ドコですか？』

やっと聞けた。

「ハイ、妃音様の潜在意識の中です。本来ならば、キチンとした形で正式に妃音様の御前に参らねばならないのですが、何せ先程も申しました通り、妃音様の“波”が何らかの邪波による妨害で、はっきりサーチ出来なかったので、仕方なく妃音様に身体的なダメージをお掛けしてしまうコトを覚悟で…」

“身体的なダメージ”ってもしかして？

モーレッツに鬼のような怒りが込み上げてきた。

その後の話なんか、聞いてなかった。

話の途中でアタシは叫んでしまった。

『もしかしてあの頭痛はそのせいだったんですか!?!』

リアルにアタマが割れるかと思ったよ。

気絶する一歩手前だったんだから!!!

アタシの鬼の形相に、如月さんはたじろいでしまって、その場でもの凄い勢いで土下座してきた。

「申し訳ありません!!!!!!」

『あつ、えっ…。』

土下座なんて。。。

思わず立ち上がる。

「本来でしたら、満月の夜に発生する“ムーンパワー”と、妃音様のストーンの“パワー”がシンクロして起きる“波”をサーチして、妃音様をお迎えに参るはずだったのですが、その“波”を正確にサーチ出来なかった為、仕方なく“フォールイン”と言う、潜在意識に入り込む方法を取らざるを得ませんでした。」

“フォールイン?”

ゴルフかっつての。

「潜在意識に入り込まなければいけないため、妃音様には耐え難い痛みを伴わせてしまいました。大変申し訳ありませんでしたっ!!!」

いやいや…。

額が擦りつく程の土下座。

『やめて下さい。もういいですから…。』

半ば呆れ気味に。

『それよりも、詳しく教えてもらえませんか？』

アタシは1つ1つ、ゆっくり、深呼吸をしてはアタマの中で確認しながら質問し始めた。

ココはどこなのか、

何で如月サンや南山サンには見えて、それ以外の人達にはこのペンダントが見えないのか、

如月サンの話の中に出てきた数々の意味不明なコトバの意味、

そして、

アタシの正体を――――

立ち上がり、直立不動で話し初めてくれた。

「ハイ！まず、妃音様が身に付けておられますそのペンダントの石は、プラチナムストーンと申しまして、我が琉按星にしかない天然石にございます。」

“琉按星”???

・・・ダメだ。

わかんない。

「この惑星の方達はそのペンダントがご覧にならないのは、その石がこの惑星に存在しないモノだからだと思われます。」

何？

“この惑星”って。

「琉按星の守護山であるプラチナムマウンテンが、プラチナムストーンで出来た鉱山でして、琉按星において、プラチナムマウンテンの力は絶対であります。」

・・・・、

はあ…。

「代々、皇家に生まれし御方の中でも、プラチナムマウンテンに認められし御方のみが、出生時にプラチナムマウンテンよりプラチナムストーンがその御方の元へと現れるのです。」

はあ…。

「その御方が次期皇位継承者となるのです。」

・・・・・・

、
、
、
で？

カンペキに、

他人事。

「妃音様が、その、琉按星の次期皇位継承者様にごぞいます。」
ふうん…。

、
、
、
、
、
、
、
、
、
、

あゝ ああああ！？！？！？！？！？！？

とんでもない声を上げてしまった。

「妃音様は、今から2世紀程未来の、琉按星と言つ惑星の皇女様であられます」

?????????????????????
????

クラクラしてる。

耐えきれずアタマを抱えてしまう。

2世紀未来？

琉按星?????

アタシ、未来の宇宙人てコト?????

「まだ思い出されませんか？」

力なく頷く。

「重症だなあ…。」

『赤レンガ…。』

「えっ!？」

『花が咲き乱れる、キレイな芝生の庭園…。』

またあの光景が浮かんた。

「妃音様？」

アタシの顔を覗きこむ如月サン。

『今日になって、突然脳裏を過った光景なんです。』

「ソレ、恐らく皇邸ですよ!! 妃音様のご実家ですよ!!」

またまた嬉しそうな如月サン。

「恐らく、プラチナムストーンが見えたとおっしゃっていた者は、レジスタニアと申します、反国家勢力の一員ではナイかと思われま
す。」

レジスタニア??

反国家勢力?????

「時空間移動は本来、我々エージェントのみが許される行為でして、一般人は出来ません。違法行為にあたります。」

時空間移動……。

「ですが、レジスタニアは独自の方法で時空間移動をしてしまうコトが多々ありまして、」

如月サンの話、耳には入るけど、アタマには入ってこない…。

「ましてや、今回妃音様のパワーを我々がサーチ出来た方法を使えば、レジスタニアが妃音様の元に現れられるのも可能です。」

何が何だか全く理解不能。

「レジスタニアが妃音様の周辺にいますと言っコトは、我々のお迎えも急がねばなりません。」

お迎え??

アタマの中錯乱状態。

「すぐにRCSに戻り、改めてお迎えに上がります。」

だからお迎えって…。

部屋のベランダに戻っていた。

見慣れた景色。

さっきまでの真っ白な世界でなくなっていた。

腕にはブレスレット。

夢じゃないんだね。

何だかワケが分からず、何が何だか全く把握出来ないよ。

まさに放心状態。

アタシは無意識のうちに、クローゼットの扉を開けていた。

今までずっと捨てずに取っておいたモノ。。。

クローゼットの一番奥の一番下。

アタシの、“宝物入れ”。

例の、如月サンが着ていたツナギにあったモノと同じエンブレムが刺繍されてるワンピース。

アタシが着ていたワンピース。

お巡りさんに保護された時に着ていた服。

急に確かめたくなって…。

悪あがきなのは分かってるよ。

ストーンのコトだって、“あの光景”のコトだって合ってるんだもん。

今でも忘れられない、脳裏に焼き付いている“あのコトバ”も。

でも、確かめたかった…。

だけど、、

同じだった。。。

案の定……。

悪あがきなのは十分わかってた。

それでも理解出来ないよ。

出来るワケないよ。

コレだったら、乃亜が言ってた通りの、

“ どうかのお嬢 ”

の方がよっぽどイイよ!!!

何なの？ “ 次期皇位継承者 ” って・・・。

しかもあるうことが

“ 2 世紀未来の宇宙人 ”

なんて。。。

ドコの世界にこんなとんちんかんなコト言われて “ ハイそうですか ” って言えるヒトがいるのよ!!!

いたら会ってみたいワ!!!

アタシは一睡も出来なかった。

ずっとベランダで満月を眺めていた。

ただただ茫然自失状態で。

乃垂に何て説明する？

いや、出来ないでしょ…。

まず本人が理解出来てないんだから、人になんか説明出来るワケないんだけど。

2世紀未来の宇宙人？？？

しかも、もっと意味不明なのが、

時期皇位継承者？？？？

全く以て、ワケがわからない…。

けど、

“命と同じくらい大切なモノですよ。”

“アナタは人の為に行動しなさい。それがアナタの使命”

ペンダントを見つめながら想うコト。

“ どうかのお嬢”・・・。

お嬢には間違いなかったよ、乃亜…。

いや、、、

お嬢って言うのか？

次の瞬間、如月サンのコトが浮かんた。

アタシの前に跪いてみたり、

アタシに敬語を使わせたくなかったり、

アタシに謙譲語を使ってみたり、

しまいには、

妃音“様”よばわり。。。

紛れもなく、

“お嬢”

だった。。

でも、

どうやって理解しろってのよ。

無理に決まってるじゃん！！

確かにアタシは、、

あつつつ…。

また見たコトのない光景がアタマに浮かんだ。今度は、、

部屋？

目の前にあるのはピアノ???

弾いてるのはアタシ???

何人かの男性が周りを囲んでる。

痛つつつ!!!

ホンの一瞬、アタマに激痛が走った。

痛みのせいなのか、浮かんだ光景が消えた。

何なの？

お屋敷の外観と言い、今度は部屋？

何だったの？

今まで一回も見なかったのに…。

アタマの中、ハンパないくらいに混乱してる。

いやっ!!!

“混乱”ってコトバダケじゃ片付かないよきつと…。

確かに如月サンの言うコトが全てホントなら、今までの謎が全て解決する。

“このペンダントが今まで誰にも見えなかったのは、この惑星に存在しないモノだから”

って…

“この惑星”って…。

ソレが愕然とする理由なんだっての！！

“この惑星”って何よ…。

スゴく他人事に聞こえるじゃない。

地球の他にも人が住める星があるっての??

あり得ないよ！！

いくら“地球が温暖化だ”とか“地球と似た環境の星がある”って
言われてるからって。

………もしホントに2世紀も未来だったらあり得ち
やうの！？

ただ自分の正体が判ったダケなら納得も行くし、パパママに報告も
出来るし、乃亜にだって笑って言える。

……のに、、

何でよりによってソコに色々くつつくのよおお…。

“2世紀未来”

とか、

“琉按星”???

とか、

あげくの果てには

“次期皇位継承者”

なんて。

非現実にも程があるよっ。

ブッ飛び過ぎてる。

だけど、

多分、

如月サンの言ってるコトは、
、
、

間違っていない気がする．．．．．

信じたくないけど・・・。

lie or truth

一睡も出来ないまま、

夜が明けた。

ちよつと気晴らしに、外を歩こう。

何だか喉が渴いたし…。

ジャージに着替えて、家を出た。

夜がつつすらと明け始め、ぼんやりと明るくなる空。

月はまだ出ていて。

今の精神状態で言うと、ホントなら、月は見れない存在でもおかしくない。

現に、月を見ると何だか胸が痛くなる。

でも、見てしまう自分がいた。

胸が痛くても、

如月サンのコトバが過つても、

視線はしっかりと、月に向いていた…。

幼い頃からのクセなんだよね、コレは。。

空を見てると気持ちが落ち着くって、

カラダに染み付いてるんだよね。

それにしても…、

どうしたらいいの？この先…。

如月サンが迎えに来るって言ってたケド…。

10年以上も何不自由なく、かつ幸せにココで暮らして来たのに、

今まで一度も思い出したコトが無かった自分の正体を無理矢理受け入れて、

10年以上もいなかったトコロに、

いくらホントの家族とは言え、

ココを離れて、戻って言われても…。

いくらパパママにはいいって言われてるからって、

二度と逢えなくなるのは耐えられないよ。

パパママだって、まさか二度と逢えなくなるとは思わずに言ってる

だろうし…。

どうしたらイイのよ一体。

途方に暮れたまま、家に戻ってきた。

洗濯でもするか。

この間にコーヒーでも飲もうつと、

痛つつつ！！！

また一瞬の激痛が走った。

そしてまたあの光景が…。

“ 皇邸ですよ！妃音様のご生家です！！！”

如月サンのコトバが、否応なしに浮かんだ。

もうイイよ！！

何だったの！？よりによってこんな時にまで！！！！

おかしくなりそうだよ…。

とりあえずコーヒを飲んで落ち着こう。

朝日が窓から射し込む朝日が眩しい。

眠いのには寝付けない、もやもやしたテンションで朝日を見ると、

いつの間にか気持ちがスツキリしてきたよ。

何だかどうでも良くなってきた。

アタシの正体も、アタシの未来も。

今、確かにアタシはここにいる。

アタシはアタシ。

今を生きてる。

アタシが誰だろうが、今、神崎妃音として生きているコトは紛れもない事実だ。

それでいいじゃない!!

よし!! 解決!!!

そう思ったら無性に眠くなってきちゃった。

バイトに出掛けるまでの間、少し寝よう。

『行って来まあゝす』

無事、寝坊するコトなく家を出る。

家を出て間もなかった。

ペンダントが黒く点滅し始めた。

点滅そのものはもううんざり気味だったけど、黒ってのがヤケに気になって…。

【妃音！】

え、つつつ！？

またアタシを呼ぶ声がしたけど、

男の人の声だ。

念の為周りを見渡す。

案の定、誰もアタシを呼びそうな人はいない…。

この点滅と関係あるんだろうか。

気になりながらも歩き続ける。

あゝ っっっ!!!

アタシの足を思わず止めてしまっ、とんでもないコトを思い出した。

南山サン…。

“レジスタニアの可能性”

如月サンの言ってたコト…。

また歩き出す。

正直、わからない。

レジスタニアって言われても…。

害があるようにはとてもじゃないけど見えなかったし、それどころかイイ人にしか見えなかったし。

だいたい、レジスタニアって言われてもどついうモンなのかわかんないし。

この点滅と関係ないだろうし。

とりあえず向かおう。

!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!

急にカラダが…。

フツ―に歩いてたハズなのに突然カラダが動かなくなった。

どうして!?!?

って、点滅が激しくなってるよ???

金縛り?

【妃音!】

また?

何?

ワケわかんない…。

点滅はどんどん速くなっていく。

アタシの心臓のドキドキにシンクロしてるかのようなスピード。

「おはよう、神崎サン。」

ドキッ…。

心臓が飛び出そうになる。

この声は……。

「おはよ・・・」

???

声が出ない…。

口が動くだけで。

この前と変わらない、爽やかな声の南山サン。

後ろからする。

顔は見えない。

カラダが動かないから…。

どうなってんの？どうしたらイイの！？

って言うか、コレは何！？

ゆっくりアタシの視界に南山サンが入ってきた。

?!?!?!?!?!?!?!?

南山サンの後ろに数人の男性がいる。

南山サンも、後ろの男性達も、同じ格好をしている。

アタシはその格好を見たたん、モーレッツな胸騒ぎが起きた。

なぜか胸が異常に苦しくなり始める。

過呼吸になりそうなくらいに。

アタマも激痛が走る。

「やっと見つけましたよ、妃音様。せつかくお逢い出来たところ大変申し訳ありませんが、我々には邪魔な存在ですので消えて頂きます。」

アタマの中が真っ白になっていた。

非道なコトを笑顔で言う南山サンに対しての衝撃と、

“我々には邪魔な存在ですので”の衝撃で。

“我々には邪魔な存在”？

まさか????

やっぱり南山サンはレジスタニア？

如月サンが言ってたコトバが怒涛のように甦る。

“反国家勢力のレジスタニアは、プラチナムストーンに反発する勢

力にございます。”

って。

“恐らく妃音様を狙っていると思われます。”

アタマを何かで殴られた気がした。

コレのコト？

南山サンが自分の右手をまっすぐ真上に掲げた。

空が急に暗くなっていく。

アタシのカラダはまだ動かない。

アタシ、このまま消えちゃうの？

息が苦しくて、もうろうつとしてきてる…。

あゝ あああ！！！！

如月サンに言われたコト！！

半信半疑だけど、こうなりや藁にもすがるしかない！

“万が一危険を感じたら、ストーンとこのブレスレットを握って強く念じて下さい”

イマイチ信じがたいけど、やってみよう。

！！！！手が動いたあ！！！！

激しく点滅するストーンにブレスレットをくっ付けて、ひたすら何度も心の中で念じてみた。

“ 助けて！！ ”

って、強く。

手が…、

手が透けてる？？？

どうなってんのおお？？？

気が遠くなりそう…。

指先から青白い光を放ちながら手が透けていく。

ふと顔を上げると、天に向かって高々と掲げた南山サンの手のひらに、丸い光が浮かんでいた。

黒い光。

南山サンの手のひらでどんどん大きくなっていく…。

アタシは本能的に察した。

“ この光に消されちゃうんだ ”

って。

“ 助けて！！お願い！！！！”

尚も念じ続けた。

【妃音様！！】

えっ？？？

誰！？

戸惑いながらも、何故だか声に反応しちゃって、

“ お願いiiiiiiii！！！！！！”

無意識のウチに声に出していた。

って、

声、出てる…？。

力の限り、喉が裂けそうな程叫んでいた。

カラダが心なしかほんのり火照っている。

叫んだのが決定打だったのか、まるでアタシの叫びに導かれたかとも言わんばかりに、ストーンとプレスレットの重なってる部分から白っぽい、眩い光が放たれた。

光はそのまま天にまっすぐ一直線に延びて、暗くなっていた空を元の明るい空に戻し、

今度は南山サン達の方に向かって延びた。

瞬きよりも一瞬の出来事だった。

「妃音様!!」

誰かがアタシを呼んでいる？

如月サン?? の声じゃないのは分かったけど、

アタシは南山サン達から目が離せなかった。

天からまっすぐ延びてきた光は、南山サン達を包み込み、

そのままどんどん大きくなっていく。

何？

全く以て、理解出来ないよ…。

もがく南山サン達。

痛つつつ!!!

また激しい頭痛が…。

と同時に、脳裏にぼんやりと何かの光景が浮かんた。

何だろう…。

南山サン達が着ている服ダケがぼんやりと…。

「妃音様!!」

アタシを呼ぶ声と同時に、視界の隅の方から青っぽい光が南山サン達の方に向かい、

そのまま南山サン達の光は空の彼方へと消えていってしまった。

ただただ、ぼー然…。

いつの間にか息苦しさが収まっていた。

心拍数は、フツーだった。

とんでもなくイリュージョンみたいな、

unbelievableな出来事を目の当たりにしてんのに、

心臓は至って穏やか…。

「妃音様!!」

あっ、そうだ。

鬼気迫る、いかにもあわてて駆け付けてくれているのが分かる、安心出来る声だった。

あんなに見せられても、穏やかなのはきっと、この声のお陰なのかも知れない。

完全なまでの安堵間で振り向いた。

だああああ→→→→→

またしても跪いてるよ…。

アレ？

この前如月サンが来ていたのと色が違う…。

ツナギっぽいのは同じだけど。

『ヤメて下さい、みんな見てま…』

恥ずかしくて、あたふたして、キョドリながら周りを見渡したけど、

誰もアタシ達の方を見向きもしない…。

まさか、あえてのスルー??

障らぬ神に何とか的な???

いやああああ!!!!!!

イツキに顔が熱くなる。

「ご安心下さいませ。今は一時的に異空間を作っております。」

跪いたまま、その人は言った。

「私共の迎えが遅くなった為、妃音様をこのような大変危険な目に遇わせてしまったコト、心身が削れる思いでございます。ワタクシ如月の上司の神楽と申します。」

“私共の迎え”に、“如月の上司”…。

やっぱり如月サンの仲間みたいね。

って、

異空間???

無意識に上下左右、しきりにキョロキョロしちゃってた。

「直接ご覧にはなれませんが、バリアのようなモノが張られております。恐らくレジスタニアが派生させたモノなのではないかと思われます。」

・・・どうでもいいや、この際。

疑問に思っというて何ですが…。

とりあえず、

今起きてるコト自体、

何が何だかわからない。

しばらくボー然。

「どうぞ、妃音様。」

ん？

神楽サンは、スツとアタシにアルミのボトル缶のようなモノを差し出してきた。

神楽サンの顔を見上げた。

安堵感は、声だけに収まらなかった。

神的なまでの微笑み。

全身の力が抜けそうになった。

「コレを飲めば落ち着きますよ。」

とは言え、得体の知れない物体…。

シルバーで無地のアルミのボトル缶。

しかもキャップらしきものが見当たらない。

ただボトル缶を見つめる。

「SMPと申します。お手を触れますと飲み口が現れます。」
なつつつ!!!

んな、イリユージョンな!!

もちろん半信半疑だったけど、言われるがまま受け取ってみる。

うわうわうわあああああああ…。

ホントに触れた途端飲み口が現れたよ。

しかも缶は触れてても冷たいとか何とも感じないのに、飲んでみたらメチャメチャ冷たいし！

目が飛び出そうなくらい大きく見開いてた。

味はスポーツ飲料みたいなんだけど、カラダだけじゃなくて、

ホントにココロまでスーッとする。

・・・

はああああああああバイトおおおお!!!!!!

ぽつつつつくり忘れてた!!!!!!

アタシは急いでケータイを出した。

ヤバイ！！完全遅刻だよ…。

って、、、、、、、、、、

・・・・・・・・・・・・・・・・

バイト先のデータが、

無い。。。。。。。。

何でつつつつ???

慌ててバイト友達の手帳も探・・・

無い・・・・・・・・・・

アタシ、ケータイを持ったまま、頂垂れ気味にフリーズ。

「いかなさいましたか姫音様！」

アタシの様子に慌てる神楽サンの声は、焦り気味に聞こえた。

『バイト関係のデータが、、無いんです。』

ワケのわからなさに、声が弱々しく震える。

「異時空間の人間であるレジスタニアがこの時代に紛れ込むコト自体、歴史の歪みを作ってしまったております。」

ゆっくり穏やかに話してくれてるのだけれど、

ショックが大きすぎるよ。

「ですので、再びこの時代から消える際にタイムラグをリセットする為に起きる、タイムバーストと言う現象のせいでは無いでしょうか。」

正直コトバの意味はわからない。

だけど、コレだけははっきり分かる。

『勝手にアタシに近寄ってきて、勝手にアタシの周りを引っ掻き回されたってコトですか?』

怒りのあまり、声が裏返ってしまった。

しかも神楽サンに言っても仕方無いのに…。

『ごめんなさい。』

うつ向いたまま何も言えない神楽サンを見てたら、冷静にならずにはいられなかった。

「我々の到着が遅かったコトが紛れもない最大の原因です。いかなる理由も通用致しません。処遇は妃音様のお気の済むようになさって下さいませ。」

ど、ど、ど・・・土下座。

『ヤメて下さい。処遇なんて！だいたい妃音様つてのも、その言い方もヤメて下さい！！アタシは神崎妃音なんです。“様”なんてガラじゃありませんから・・・』

恥ずかしさと気まずさと動揺のあまり、勢いつけて立ち上がり、神楽サンを引き上げた。

「妃音様・・・」

物憂げな表情の神楽サン。

『正直、まだ、全くとってイイ程自分の正体を把握してません。自分で收拾が付かなくなつて、昨夜は一睡も出来ませんでした。』

ゆっくり話し始めた。

じつと聞いてくれる神楽サン。

『でも、気付いたんです。アタシが誰だろうと、今いるアタシは神崎妃音なんだって。そしたら気がラクになつて・・・』

ほんのり笑顔になる。

少しの間、沈黙が流れる。

『でも、こうして狙われる現実があるってコトは、否が応にも自分の素性を受け入れなきゃいけないってコトなんですよね。』

依然として黙って聞き続けてる神楽サン。

『神楽サンだって、アタシを迎えに来てくれたんですもんね。』

「妃音様の仰る通りでございます。」

・・・、おいおい…。

人のハナシ、聞いてますか？

呆れ気味にため息。

『だから、時間は掛かるとは思いますけど、ちゃんと把握していきま
すから、待ってもらえますか？』

ムチャクチャかなあ、アタシ…。

わかってるよ、無謀だってコトくらい！！

大抵こういうのって、すぐにとか、ゴーインにとか、本人の意思に
関係無く連れていかれちゃうモンじゃない？…

「かしこまりました。妃音様の意思を最優先しろと皇王様から敕命されて参りましたので。」

意外と呆気なく、あっさりと、

しかも即答だった。

“皇王様”……。

お父さん…、いや、お父“様”なんだよね、きつと。。。

“アタシの意思”…。

今すぐ強制的にじゃないんだって、ちょっとだけ安心する。

きつと強制的に連れて行かれるんだって勝手に暴走してたのが、把握出来ない理由の大半を占めてたから。

時間があるって分かったら、かなりラクになったよ。

『ありがとうございます。だいぶ気がラクになりました。』

自然とアタマが下がっていた。

「妃音様にそのようなマネをされてしまいますと、ワタクシの立場が無くなってしまうです！！おヤメ下さいませ。」

………

ダメだ、この人…。

呆れを通り越して笑いに変わるよ。

『で、神楽サンはどうするんですか？』

「妃音様こそワタクシのような者にそのような言葉遣いはなさらないで下さい。」

・・・・・・・・・・

生真面目だなあ…。

20代半ば…くらいかなあ。

いやっ！後半いつてるかな、やたらと落ち着いてるから。

『神楽サンがヤメないなら、アタシもヤメません！』

アタシ、意地悪なコト言ってるかな？

ちよつと皮肉っぽく笑いながら。

神楽サン、沈黙。

ちよつと顔を強ばらせて。

「そのうち直して頂きます。」

毅然と、アタシをじっと見据えて。

アタシはただ頷いた。

ソレを見て、笑顔になった神楽サンは言った。

「妃音様をお護りするのが我々の使命ですから、妃音様の警護をさせて頂きます。ただ、さすがに直接ずっと妃音様に付きつきりと言うワケには参りませんので、ワタクシは妃音様以外には見えないように妃音様のお側におります。」

えっ・・・。

「よろしいでしょうか。」

躊躇いがちに頷く。

しょうがないよね、

アタシ、“狙われ”てんだから。

「ご理解頂きまして誠に恐縮です。感謝致します。」

アタマを下げる神楽サンに、アタシもつられてアタマを下げていた。

とは言つものの・・・

いくら“狙われてる”とは言え、

周りには気付かれないとは言え、

急に“おとも”が付いちゃうのはねえ。。。。

どうしたらイイかわかんないよ。

とりあえず2人で家に向かった。

と言っても、周りからすればアタシ1人だけだ。

「ワタクシが周囲から姿を消してる間は、妃音様がワタクシと話してる姿は周囲から見えません。」

『アタシも消えちゃうんですか?』

アタシはとっさに尋ねた。

神楽サン、軽く笑ってる?

「いえ、妃音様のお姿は消えません。ご安心下さい。特に何もなさってないようにしか見えませんので。」

.....

不思議いいい…。

でも、神楽サンの“ご安心下さい。”は、尋常じゃない程の安心感。

ココロがスーッとする気がする。

良かった、“1人で見えない相手に話し掛けてる”なんて言ったら、間違いなく通報されちゃうもんねっ。

安心して、“周囲からは見えない”神楽サンに質問した。

もうさっきのバリアのようなモノは外れているようで、神楽サンは姿を消している。

アタシには見えてるケド。

『如月サンは?』

「ハイ、如月は何せまだ新人なもので、研修等御座います。ワタクシが妃音様からのストーンのパワーを感じましたので、ワタクシが参りました。直に如月も参ります。」

えっ???

思わず立ち止まる。

「いかなさいましたか?」

焦る神楽サン。

アタシも焦るよ。

『2人で“おとも”するんですか?』

声が裏返る。

「交代で行います。如月は度々抜けなければなりませんので。」

『・・・ですよね。』

ひと安心。

確かに他に用事があったり休みとかもあるしね。

『ただいまあ。』

昨日から目まぐるしい変化の連続だけど、パパママの前では至って普段通りに。

いつもの様に明るく帰宅。

あ・・・れ？

玄関にブーツがある。

パパの？…じゃないよね。

お客さん？

んんん？？？

もしかして。。。。

「如月？」

神楽サンの表情が鬼の形相になっている。

そのまま視線を神楽サンの足元に下ろす。

・・・同じブーツだ。

どーゆーコト？

玄関でしばし立ち尽くすアタシと神楽サン。

「お帰り！！何突っ立ってんのよ、みんな帰って来てるわよ。早く上がんなさいよ、妃音も神楽も。」

はい????

みんな??????

ママが顔を出した。

みんなって？

パパの他に誰が??

って、、

“神楽も” って言った？今…。

神楽サンの姿は見えないんじゃないの？

神楽サンの表情を伺う。

見るに耐えないほどの怒りの表情に思わず怯んでしまう。

『如月いいい…、サン?』

震えそうな想いを必死に押さえて、怒りに震える神楽の気持ちを察して如月サンを呼んだ。

「はい。」

確かに如月サンの声だ…。

中から出てきた顔を見て、アタシは啞然としてしまった。

紛れもなく、如月サンだ。

元氣良く出てきた如月サンも、神楽サンの表情を見た途端足がすくんだのか、立ち止まってしまった。

『とりあえずアタシの部屋に…。』

2人を2階のアタシの部屋に連れていった。

どんどん神楽サンの表情が険しくなっていく。

ソレに比例して小さくなっていくのかと思いきや、如月サンはどにかしらふてくされ気味。

「どついつコトだ如月！」

神楽サンの声はかなり荒れている。

「どついつコトって、オレ、何かしましたか？」

全く悪びれる様子のない如月サン。

神楽サンは、深く小さなため息を1つついた。

「異時空間の人間が他の時代や惑星に来た時はその時代や惑星の人達に見えないようにしなければならぬとアカデミアでやらなかったのか？」

ゆっくりと、低い声で淡々と話してるけど、迫力は半端ナイ程あって、ドスすら感じられる。

聞いているアタシが恐れおののくよ…。

何も反論出来ず、黙ったままの如月サン。

アタシはふと、南山サンのコトを思い出してしまった…。

後ろにいた人達の姿も。

!!!!!!!!!!!!!!

また一瞬の激しい頭痛が襲った。

『つつうう。』

つい声に出してしまった。

アタマも無意識のウチに押さえてて。

「妃音様？」

説教の真っ最中にも関わらず、声を掛けてくれたのは神楽サンだった。

『大丈夫です。』

ひきつり気味の笑顔で答える。

この光景、見るに耐えないよ。

そおーっと部屋を出よう。

「リゲートだな。」

「ええええ???」

背後から泣きそうな如月サンの声がする。

リゲート？

足は部屋の外に向かいながらも、耳は完全に背後の2人。

「我々までイントロードを使ってしまったら、妃音様に不適切な言葉遣いをしなくてはいけなくなってしまうではないか!!」

・・・イイよそんなん…。

どこまでマジメなんだ？この人…。

そこまで考えてなかったと言わんばかりの、驚愕の表情の如月サン。

“我々”まで”・・・。

またバイトのコトが浮かんだ。

週2～3とは言え、1年くらいやってたからなあ…。

じんわり涙が滲む。

辞めたワケじゃないのに辞めた。

しかもやってた事実が消えて。

理解不能すぎるよ…。

感傷に浸るにも浸れないし。。。

ゆっくりと階段を降りて飲み物を3人分用意してまたゆっくり戻った。

自分の部屋なのにアタシがドアをノックする。

まあノックしてすぐに入るけどね。

飲み物を持って慎重にドアを開けてたらずかさず神楽サンが駆け寄ってきてくれた。

「恐れ入ります妃音様。」

かなりの速さだった。

機敏すぎるよ。

単純にそう思う程。

『あ…、りがとうございます。』

“妃音様にそんなコトをさせるなんて！”

って言わんばかりの様子。

依然としてしょぼくれてる如月サン。

『さっき言ってたリゲートって…、』

上目遣いで神楽サンに聞いてみる。

「如月はまだ研修期間ですので、何かミスをしたらアカデミアと申します、我々エージェントの養成機関に出席って、やり直さねばなりません。そのコトをリゲートと申します。」

なるほど。

リゲートの意味はわかったよ。

だけど、“やり直す”ってのと、尋常じゃナイ程の如月サンの凹み具合を見ると、相当辛そうだよ？

そりゃ、“出戻り”なんてイイ訳ないよね。

この2人、この時代でも良く見る“優秀で冷静沈着なエリート上司に無鉄砲でやんちゃな部下”って感じだし。

いつの時代にも、どこにもいるんだなと思うと何となくほっとけない。

『嫌いじゃなかったら飲んで下さい。』

少しでも空気を柔らかくしたいから。

「恐れ入ります妃音様。」

「恐れ入ります。」

神楽サンのあとに、つられて如月サンも。

『ママ達がもう如月サンや神楽サン達を認識してるんですから、今さら変えられませんよね？』

アタシは自然と切り出した。

「大変申し訳ありませんが仰る通りでございます。」

渋い顔の神楽サンが答える。

『もし今から強引にでも変えるとなると、また、タイムバーストが起きちゃいますよねえ？』

無意識的に“また”に力が入ってしまった。

気付いた神楽サンが、悲しい表情になっている。

アタシはとつさに閃いた。

『神楽サンの的には、アタシにタメ語を遣わなきゃ行けないって、心苦しいかも知れませんが、神楽サンが望む、“アタシが神楽サン達にタメ語”は、これで嫌でもしなきゃいけなくなっただけです。コレでいいじゃないですか。』

起死回生！！

とまではいかないかなあ。

説得力あるような、ないような…。

「妃音様…。」

如月サンの顔が緩む。

『如月サンがどれだけ重大なコトをしてしまったかはアタシには分かりません。だけど、今回のコトは無かったコトにしてあげられませんか？』

「妃音様ああ。」

涙目で満面の安堵の表情の如月サンのコトバを、見事なタイミングで神楽サンのコトバがかき消した。

「妃音様!！」

ちよつと怖い…。

「とりあえず報告は致します。」

“上司として”は、そりゃ当然だもんね。

まあ仕方ないか。

『ハイ。』

笑顔で頷く。

「如月のしたコトは、リゲートはおろか、研修中に無断ですので下手をすると一発退職に値します。いくら妃音様の恩情とは申しまして、まるっきりのお咎めなしとまでは参らないと思います。」

一発退職ううう??????

レッドカードってコトじゃない!?!?!?!!

まあ無断は良くないよね、確かに。

「ありがとうございます、妃音様。何と申したらよいのか…。」

ハンパない程に喜んでる。

よっぽどイヤなのね。

「失礼致します。」

そう言うとき神楽サンは自分の胸元のペンダントに手をかざした。

如月サンも“あの時”ペンダントに向かって話してたっけ。

!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!

神楽サンのペンダントから人の画像が現れた。

心臓が口から出そう。

コトバが出ない。

3D????

じゃないよね…。

まるっきり立体だもん…。

何Dになるんだろう。

「初めまして妃音様。ようやくお逢いできましたコト、喜ばしい限りでございます。」

あああああ……。

立体映像の男性も、やっぱり跪いてる。

何コレえええ……。

画像が動いてるよ。

しかも声まで……。

こんなん見せられたら、パニックを通り越して、嫌でもこの人達は未来の人達だっと思わざるを得ないよ！！

「ワタクシ、RCSの最高責任者を仰せつかっております、朱雀と申します。妃音様のご生存の確認がここまで遅くなってしまいましたコト、お詫びのしようもございません。」

あわあわあああ……。

立体映像が土下座してるよ……。

驚きすぎて、身動きも出来ない。

神楽サンが朱雀サンに報告してるのを、ジッと聞くアタシと如月サン。

やっと表情が和らいだかと思ったのに、また如月サンは泣きそうな顔をしてる。

結局、如月サンはアタシの恩情で、本来1年の研修期間が、1年延

長と言う処分でカタがついたのだった。

かくして今までずっと養子の一人っ子だったハズのアタシは、

突然2人の兄を持つ、3人兄弟の末っ子になってしまつのであつた。
.
.
.
.

l a s t m e m o r y

イントルードってのは、その時代に潜入する上で都合のいい様に一時的に歴史を新たな事実を加える技術のコトらしい。

一時的になんだから、一種の催眠術のようなモノだとは言うけど…。

『じゃあ神楽サン達がこの時代からいなくなる時は、アタシがこの時代にいたコトも消えちゃうってコトなんですか？』

アタシ、何てディープな質問してんだろ。

一歩間違えば、ブラックネタだよねぇ…。

ってか、自虐的？

神楽サンは黙ってしまった。

ちなみに如月サンは、朱雀サンのお説教と、エージェントの規則のやり直しの為、しばらくの間の夜間はRCSに戻るハメになった。

沈黙が続く。

日中はアタシの警護で夜は研修なんて、かなりハードだけど、

“「オマエが自分でそうしたんだろ？」”

って、皮肉全開で朱雀サンに言われちゃって何も言い返せてなかった。

た。

さすがに可愛いそうだけど、コレも処分の一環だと思つと、仕方ないんだろうなつて氣になつてしまふ…。

アタシの自爆的発言に、神楽サンは黙つたまま。

ん????????????????.....

あ、、、、

れ、、、、れ???????

アタシ、氣付いちゃったかも。。。。

とてつもなく、果てしなく、限りなく自爆的なコトに…。

『神楽サン達じゃなく、、』

アタシは、その先が言えなかった。

言いたくなかった。

コトバにしたくなかった。

ココにいるコトで“歴史の歪み”を作っているのは神楽サン達なワケでは無く、

アタシ

なんじゃないだろうか………。

今さら気付いたって、もう手遅れだよ？

アタシだって自分のコトながら、どうしてココにいるのかわかんないし。

ヤバい、辛すぎる。

だけど、さっきのバイトの時と同じで、何故なのか、涙が出ない。

ワケが分からなすぎるからかなあ…。

気を落ち着かせるため、ベランダに出よう。

「何かお飲み物、お持ち致しますか？」

優しさに溢れた神楽サンのコトバに何となく癒されて、素直に頷いた。

「かしこまりました。」

すぐさまドアが閉まる音がした。

相変わらず機敏だなあ…。

振り返り、閉まっているドアを見つめた。

あっ…。

視界の隅に、“あの”ワンピースが入った。

クローゼットから出して、部屋の隅に置いておいたんだった。

しまつのも、堂々と出しておくのも忍びなくて…。

アタシはワンピースを手にして、再びベランダに戻った。

何か思い出せないかなあ。。。。

何でもイイんだけどあ…。

じい…とワンピースを見いる。

ダメだっ、全然思い出せない。

痛つつつつっ!!

えっ???…。

またの頭痛の後に浮かんだ光景は、多くの人がアタシの周りにいる光景だった。

かなりの広間みたいで、遠くまで人がいる。

！！！！！！いったあああい…。

まだ痛みが続く。

浮かんでる光景も、消えない。

またしてもアタマを抱えちゃうよ。

痛過ぎて、脈を打つのが分かる。

心拍数も早くなってるし。

あつ、景色が変わった…。

ピアノ？

そばには男の人。

神楽サンと同じ格好してる人。

だから痛いつてばあああああ！！

何なのよ一体！！

フォールインじゃあないんだよね。

ドアがノックされたけど、痛くて弱々しくしか返事出来ないよ。

「お待たせ致しました妃あ…、いかがなさいましたか？」

神楽サンの声が緊迫している。

背中を向けたまま、手を上げて手で“OKサイン”を出す。

それでも神楽サンは駆け寄ってきてくれた。

『大丈夫で…す。』

精一杯の返事。

声もあまり出せない。

フォールインされた時よりは痛くないけど…。

ん？いい匂いがする。

コーヒーだ。

痛みを堪えてアタマを上げる。

「どうぞ。」

すかさずコーヒーを差し出してくれた。

『あつ、アタシのマグカップ…』

「お母様に伺いまして、お父様とお母様にも淹れて参りました。」

『ありがとうございます…。』

ふと顔を上げると、神楽サンは自分の分も見たコトがないマグカップに入れて持ってきていた。

そう言えばさっきの夕食の時も如月サンも神楽サンも見たコトないお茶碗とお箸を使ってたっけ。

それにしてもスゴくいい香り…。

香りだけでも堪能出来ちゃうな。

ウチにこんないい香りのコーヒーなんかあったっけ!?

『コレも出したんですか? SMPみたいに。』

アタシの質問に、フツと笑みを見せた。

「とんでもございません。キッチンにあったモノだけで淹れただけですよ。」

ええええ???!!?

思わず目を大きく見開く。

信じられないよ。

じゅっとコーヒーを見つめた。

「嘘ではございません。」

苦笑いの神楽サン。

アタシは驚きのあまり、神楽サンのコトまでじゅっと見てしまっていた。

『200年以上も未来の人なのにこんなコトができるんですか?』

アタシの勝手なイメージは、何でもオートマチックな気がするから。

「コレはワタクシの趣味でございます。」

趣味……って言ったって、

啞然とするしかなかった。

「ご気分はいかがですか?先程も頭を押さえておられませんでしたか?」

立ったままの神楽サンに、アタシは座るよう促した。

アタシだけベランダに置いてある縁台に座ってるのも何だか申し訳ないからね。

ちよっと横にズレる。

「失礼致します。」

遠慮しすぎなのか、キョドリ気味の神楽サン。

2人の間に不自然な距離が…。

ま、いつか。

何となく笑っちゃう。

『昨日から度々あります。その痛みの後に、見慣れない光景が浮かぶんです。』

「痛みの後の見慣れない光景？で、ございますか？」

神楽サン、眉間にシワが寄ってる。

『如月サンに話した光景は、きっと皇邸だって言われました。』

神楽サンの眉間のシワが倍増した。

「如月にお話になったんですか？」

ヤバつつつ！！

マズった…。

神楽サンの顔を見て、瞬時に察した。

“また如月サン、怒られる…。余計なコト言っちゃった？”

って。

『いやっ、あの…、アタシが言っなって言っただんです、そう言えば！！ごめんなさい！！如月サンは悪くないです！！！！！！』

下手だな、アタシ…。

いくら咄嗟に出たとは言え、コレは無いよなあ。

「妃音様は如月をかばいすぎです。如月の為にもなりません。」

はあああ怒ってるううう…。

肩を落とす。

「もし仮に、いくら本当に妃音様が言ったと仰ったにしても、如月の立场上、妃音様のご安否や身辺に関わるコトは逐一報告しなければならぬのが鉄則です。如月はまだ研修中の身なんですから。いくら妃音様の厳命と言えどもコレは例外です。」

はあああああ。

ため息。

神楽サンは、ホントに生真面目なんだな…。

仕方無い、話をそらそう。

『でも、どのみちそれだけじゃないんです。南山サン達の格好を見てから、あの服装の人達の光景が何度か浮かんだり、さっきはアタシの周りにたくさんの方がいました。部屋らしき光景も浮かびました。』

「恐らく、ストーンのパワーが発動し始めたのがきっかけで、少しずつ妃音様のご記憶が甦り始めているのではないのでしょうか…」

記憶が？・・・

神楽サンはまたブレスレットに手をかざした。

今度は風景が現れた。

「こちらは現在の皇邸でございます。」

心臓が何かに貫かれた気がした。

パツと映った庭の映像…。

そっくりそのまま、あの浮かんだ光景だったから…。

絶句。

「こちらはセレモニーホールでございます。」

・・・コレって。。

またしても絶句。

大勢の大人達がアタシを囲んでいたホールだ。

痛つつつつつ！！

また一瞬の激痛。

アタマを押さえる。

「大丈夫ですか？」

焦る神楽サン。

『続けて下さい。』

でも、神楽サンは完全にフリーズしていた。

『神楽サン？』

神楽サンは一点を見つめたままだ。

「妃音様、」

表情が、

怖い…。

『ハイ…。』

返事が弱くなる。

「レジスタニアにも反応なさって頭痛が起きたんですか？」

神楽サン??????

怖いまだ。

『ハイ。』

また弱く返事。

「その後の頭痛はどのような光景が？」

どんどん表情が怖くなっていく。

『さっき、ベランダで何か思い出せないかなと思ってたら、セレモニーホールと、後はピアノとエージェントの方が浮かびました。』

「それはもしかちらのお部屋でございますか？」

神楽サンが見せてくれた映像を見た途端、アタシの脳裏に、まるでフラッシュバックかのようにいろんな映像がランダムに浮かび出した。

心拍数が急に速くなり、手が震え、涙が流れ始めた。

頭痛もして。

「妃音様?。」

取り乱す神楽サン。

脅えるアタシ。

今のアタシのアタマの中、

完全に、

覚醒

しちゃった・・・・・・

だんだん息苦しくなってくる。

涙もボタボタ床に落ちる。

『セレモニーホールはアタシのバースデーパーティーが行われたホールです。』

呼吸が乱れたままで、可能な限り、ゆっくりと話し始める。

「妃音様、無理をなさらないで下さい。」

そつとアタシの肩に手を掛けてくれる。

『アタシを囲んでいた大勢の大人達は、その時来て下さっていた方々で、』

ダメだ、息が続かない…。

肩で息をし出してる。

「もう結構です。おやめ下さい。」

必死に止めようとしてくれてる神楽サン。

だけど、アタシは口に出したかった。

そうじゃないと余計堪えきれない気がして。

次から次へと甦ってくる記憶に。。。

『その後、部屋に戻ってピアノを弾いてたら、突然レジスタニアが現れて…、』

心拍数が更に上昇する。

ますます息が荒くなる。

たった一言二言で、はあはあしちゃう。

『周りにいたエージェントがアタシを護ってくれたんですけど、1人2人と次から次へと消えていって。』

「消えた？」

神楽サンの眉間のシワ、マックス…。

アタシの心拍数も、恐らくマックス…。

!!!!!!!!!!!!!!

か…、ぐら…、…、サン??????

神楽サンのカラダが、アタシに覆い被さるかのように、上半身全体がアタシを包んだ。

「もう大丈夫です、どうかご安心下さいませ。もう何も仰らないで下さい。」

摩訶不思議…。

嘘みたいにスーッとココロが落ち着いた。

光が降り注ぐかのように、気持ちが晴れた。

心拍数もゆっくりだけど、落ち着いてきて。

間違いなく、科学的根拠は皆無だろうケド、やっぱり神楽サンの“ご安心下さい”には言い知れない力があるな。

もしかしたら、 α 波辺りを刺激されてんのかなあ…。

アタシ、、こんなに余裕出来てるよ、あんなに苦しかったのに・・。

恐るべし！

神楽サンの“ご安心下さい”パワー・・・。

何て強大なパワーだったのよ！！

神楽サンの方がよっぽど何か力でも持ってるんじゃないの！？

神通力的なモノを。。

うわっ！！

ストーンも反応してるよ。

水色っぽいのに、言い様の無い温かみを感じる。

ぼんやりとゆっくり光ってる。

『その後は憶えていません。と言うか、気が付いたらこの時代にいました。』

「その時御召しになっていたのがそちらのワンピースでございますか？」

アタシがずっと握り締めていたワンピースにそっと触れた。

『ハイ…。ずっと棄てられずに取ってました。そのお陰で、如月サシと逢った時、このエンブレムに反応出来ました。』

ワンピースをジッと見つめて。

「そうでございましたか。実を申しますと、妃音様の搜索にここまですで長い年月がかかってしまった理由が、誰も証言者がいなかったからなんです。そういうコトだったんですね。」

小さく頷く。

またちょっと胸が痛み出す…。

コーヒーを一口。

「その時に何らかの時空間の歪みが出来て、この時代にタイムワープなさったんですね。恐らくストーンのパワーでしょうね。」

ストーンのパワー…。

『そう言えば、白い光に包まれた気がします。眩しくて、目を閉じちゃって、開けたらこの時代にいました…。』

どんどん甦ってくる。

この十数年、一度足りとも思い出さなかったのに…。

摩訶不思議だわぁ・・・。

「貴重なお話、ありがとうございました。心痛を伴わせてしまったコトを申し訳なく思います。」

そう言うとき神楽サンは深々とアタマを下げた。

『やめて下さい！！アタシが次々出てくる記憶に堪えられなかっただけなんですから。口に出さないと潰されちゃいそうです。』

「もう大丈夫です、ご安心下さいませ。」

うわっっっ！！出たよ！！！！！！

神々しさすら感じる。

思わずストーンを見る。

『神楽サンで、神通力的なモノでも持ってますか？』

たまらず聞いちゃった…。

「えっ?????」

苦笑いしてる。

『神楽サンに“ご安心下さい”って言われると、神憑り的な癒しを感じるんです。そのせいなのか、ストーンが光るんです。』

「何かの偶然ではないでしょうか。そのようなモノは自覚しておりませんし、言われたコトもございません。妃音様にそう仰って頂けるのは大変光荣極まりありませんが。」

失笑気味に答えた。

ふう〜ん。

何とも不思議なコトもあるモンだね…。

「あいにくワタクシには何の力もございませんが、ワタクシのコトバが妃音様のお役に立てるのでしたら、ワタクシは本望でございます。」

.....

な、に?...

この胸騒ぎ・・・。

ドキッとしちゃった。。

！！！！！またストーンが光った。

一瞬だけ、ぼやあゝっと。

「いかなさいましたか？姫音様。」

ストーンに目をやったままで固まってしまっていた。

「えっ？」

“いかなさいましたか？”って、見えなかったのかなあ…。

「あつ、いや、今また光ったんで。」

「えっ？？？？？」

急に慌ただしくなる神楽サン。

「あつ、えつと…、一瞬です。」

アタシがキョドっちゃうじゃないのよ！

『ストーンが放つ光の色の意味って、何かあるんですか?』

思い切って聞いてみよう。

「大変申し訳ありませんが、ストーンは認められた御方しか所持出来ない上に、所持なさってる皇王様各々様によっても、効力や力が異なる為、簡単には解析出来ないのが現状でございます。」

何と!!!!!!!!!!

またしてもストーンに目を向けてしまう。

「現に、妃音様ほどに様々な現象が起きると言う事例はあまり伺ったコトがありません。妃音様はよっぽどプラチナムマウンテンとシンクロする何かをお持ちなのだと思います。」

そうなのおお??????

またまたストーンをじーっつと見入ってしまうよ。

あんびりーばお…。

つくづくスゴいのね、このコは。。。

アタシはしばらくストーンから目を離せないでいた。

ソレにしても、今日1日、いろんなコトがありすぎて、1日が1日じゃないみたいに過ぎたなあ。

ちよっとしか寝てない上にこの慌ただしさで、本当ならモーレツに眠いハズなのに、ちっとも眠くないよ。

もう夜中の3時を回っている。

ベランダで1人、星空を眺めて。

神楽サンは隣の部屋で、しっかりアタシの姿を確認出来る場所で、報告書を作成中。

アタシの部屋とベランダづたいで繋がっている、誰の部屋でもなかったハズの部屋は、

今は男子2人の部屋に変わっていた。

“ いつの間に?? ”

“ どうやって!?”

と疑わざるを得ない程、前からあったかのような違和感の無さに、アタシは啞然とするしかなかった。

あれ? 神楽サンがいない。

ふと隣の部屋に目を向けたケド、さっきまでいたハズの神楽サンがいなくなっていた。

トイレにでも行っただのかな。

しかし、真面目だよなあ、神楽サンで。

如月サンとは正反対だよな。。

堅物とも言っちゃうよね。

でも、

何故だろう。

言い様のない、絶対的な安心感がある。

パパとは違うんだけど、でも何となく“父親的”な包容力みたいなものもあって。

何ていったって、あの“ご安心下さい”には恐らく科学的には説明出来ないであろう力があるモンね。

んっ??この香りは…。

「いかがですか?」

神楽サンはコーヒーを淹れに行ってくれてたのか…。

『ありがとうございます。あっ…。』

もしかしてこの色って…。

「時間も時間ですので、カフェオレでございます。」

くうううう…。

何て泣かせる心遣い。

あっ…。

『お帰りなさい。』

後ろに如月サンもいた。

「ただいま戻りました。」

真摯な表情で挨拶。

大変だったんだね…。

『お疲れ様です。』

笑顔で返した。

「妃音様、大変遅くなりました。妃音様仕様に用意致しましたので、お取替致します。」

あつ、そつか…。

「失礼致します。」

如月サンが外してくれた。

やっぱり軽く触れたダケ。

神楽サンがアタシに差し出したのは、翡翠のようなキレイな青の箱だった。

切れ目も分かれ目も凹凸も何もない全くのただの箱。

まさか…。

「お手を。」

と神楽サン。

やっぱりかあああ。

言われるがまま手をかざすと上の部分が消えて中のモノが現れた。

うわあああ。

まるでイリュージョンだよ…。

入っていたのはブレスレットだった。

手に取った途端、スーッと手首に入って行って、手首でピタッと止まった。

またまた啞然。

コトバも出ない。

「そのブレスレットは、時空間移動の際の衝撃防止の為に、同時にレジスタニアの“気”を感知する機能があります。妃音様の場合は、ストーンとブレスレットの“波”がシンクロしますので、我々なんかよりも遥かに強大なパワーを発揮すると思われます。」

神楽サンのコトバを聞きながら、ジーッとブレスレットに見入っていた。

「ちなみにそのブレスレットも琉按星にしかございませんので、この方々にはお見えになれませんのでご注意下さいませ。」

『は・・・い。』

じろじろ眺めながら。

「それと、本来コレは我々エージェントのアイテムなのですが、今回妃音様が御一人になってしまう状況が我々の不手際により生じてしまう可能性がございますので、bossの朱雀を通して皇王様の

許可を頂きまして、妃音様仕様にリングタイプをご用意致しました。

「

ん？

“我々エージェントのアイテム”？

アタシ仕様にリング？

『そのペンダントのコトですか？』

神楽サンや如月サンの胸元のペンダント。

2人ともあのペンダントで話してたっけ。

「ハイ。妃音様はペンダントですと2つになってしまいますので、あえてリングに致しました。」

またさつきと同様に、つるんつるんの四角い箱を差し出してきた。

まさかコレも？

と言わんばかりに上目遣いで神楽サンを見る。

笑顔で頷く神楽サン。

やっぱりか。

もうさすがにさっきほどは驚かないよ？

むしろワクワク♪

スツと手をかざす。

おう！出たつつっ♪

上部が消えて、リングが現れた。

んで、コレも？

また上目遣いで確認。

また頷く神楽サン。

アタシはふとした疑問をぶつけてみた。

『もしかしてこういうシステムなら、好きな人につけてあげるとかは出来ないんですか？』

って。

触れたダケで装着出来ちゃうんだもん、そんな疑問もそりゃ浮かぶよね。

すると神楽サンはスツと指輪を掴んだ。

あれつつっ？？？？？

普通に持ててる…。

無言のままキョドる。

「失礼致しました。」

神楽サンは、そう言って箱に戻した。

「普通に取れば取れますし、かざすと装着します。」

ひえええええ。

またまた絶句。

でも、試したがるアタシ。

言われてみれば確かにそうだ。

SMPも、箱を開ける時も、ブレスレットをつけるときも、“かざして下さい”って言われた。

普通に取ってみる。

うおつつつつ…!!!

ホントだ、取れた。

へえええ…。

あんびりーばばあ。

「で、そのままつけて差し上げたい方の指に触れると入ります。」

はああああ。

さっきからずっと指輪に釘付け。

「チーフ、つけて差し上げたいかですか？」

思わぬ如月サンからの提案に、神楽サンは分かりやすく動揺した。

「何をたわけたコトを言い出すんだ如月！！そんな恐れ多いコト、オレごときが妃音様に出来るか！！」

ドキッ…。

神楽サンの分かりやすい動揺と、アタシには絶対言わない、如月サ
ンにしか言わない、“オレ”に何故かドキツとした。

「イヤですか？」

ちよつとからかってみた。

! ! ! ! !

如月サンがにやけて、神楽サンは動揺が顔に出始めてきた。

「よろしいの…、です…、か？」

ド
ツ
キ
↓
↓
↓
↓
↓
ン
!
!
!
!

何だろ、このドキドキ…。

モヤモヤ？

分かんないなあ…。

アタシは分かんないまま、ゆっくり頷いた。

「失礼致します。」

あんなに動揺してたクセに、そんな素振りを微塵も見せずに、毅然とした態度でつけてくれた。

ホントなあ…。

神楽サンが持っていたハズの指輪が、アタシの薬指に触れた途端、スツと薬指に入った。

「失礼致しました。」

ぽか〜んとしているアタシに向かって深々とアタマを下げて。

『凄おおおい…。』

指輪からしばらく目が離せなかった。

「その指輪もブレスレットもこの時代の方々にはお見えになりませんのでご注意ください。」

神楽サンの説明も半分流し気味に。

またしてもいつの間にか夜が明けていた。

2日連続オールナイト…。

いい加減眠くなってきたな…。

夜明けの光がヤケに眠気を誘っていた。

アタシはその日、昼過ぎまで寝てしまっていた。

目覚めて時計を見ると、間もなく2時になるところだった。

アタシはイツキに全身の血の気が引いた。

バイト遅刻じゃないのよ!!!!!!

何で??????

何でアラームがならないの????

何で誰も起こしてくれないの??????

ヤバイよおおお…。

慌ててケータイを確認。

店から着信も来てない…、

………んつつ？？？？？

違った……。

バイトしてたってコト、消えちゃったんだっけ…。

自爆……。

そのままケータイを見つめたままブーツとして、次第にじんわりと泣けてきた。

1年ちよつとの間とは言え、土日はほとんどバイトだったから。

バイトのない日曜なんて、学校行事とか模試の時くらいで。

そっかあ…。

うわっ！何しよう…。

とりあえず下に降りよう。

下に降りると、みんながリビングで寛いでいた。

今日は珍しくみんなそろっている。

“みんな” っていつでも、2人多いけど…。

おっっっ！！コーヒーのいい香り。

「今日はずいぶんとゆっくりね。」

ママが片付けをしながら声を掛けてきた。

「神楽が、明け方まで起きてたから寝かせといてって言っから。」

ママと2人で片付けをしながら軽く微笑む神楽サン。

『ありがとう。』

神楽サンにじゃなくて、みんなに対して。

「何か食べる？」

そう言えばおなかが空いたかも。

『うん。何でもイイよ、用意しやすいモノで。』

「じゃトーストとコーヒーでイイですか、妃音様？」

えっ！？みんなの前なのに??????

と一瞬ドキツとしちゃったケド、わざとなのか、言っちゃった的な感じなのか、含み笑いで神楽サンが言った。

即座にアタシも対応。

『十分です。恐れ入ります神楽様。』

ちよつと気取ってみたり。

アタシは100%わざとだけどね。

みんな笑ってくれた。

「ヘンなの。」

如月さんは素で言ってるっぽかった。

「申し訳ありません妃音様。」

こつそり耳元で小声で言ってきた。

『イエエ。』

まだ気取ったままで。

軽く食事したところで、地下へ。

音楽一家の我が家には、地下に防音室があるの。

ちょっとしたスタジオにもなっていて。

神楽サンと一緒に降りてきた。

如月さんは補習へ。

パパママは上で仕事。

「妃音様は琉按星におられた頃からピアノがお上手と伺っております。いまだにその腕はご健在だったんですね。」

アタシのピアノを聴きながらふと如月さんが言った。

『ありがとうございます。ピアノのお陰で神崎家に養子に入れたんです。ピアノには凄く感謝してます。』

心からそう思うよ。

何も楽器が出来てなかったらきつと、神崎家にはいなかったんだろうなって…。

「キレイなメロディですね。」

弾いてたのはアタシが好きなミュージシャンの、一番好きな曲。

『アタシの大好きな曲です。神楽サンは何か楽器出来ますか？』

「妃音様にお聴かせ出来る程の腕はあいにく…、」

とか言いながら、明らかに照れてるよ…。

解り易つつつ！！

『ココにあるモノだったら聴かせて下さい。』

期待爆裂で。

立ち上がり、ピアノを離れた。

「全く以て大した腕前ではございませんが…。」

と謙遜しながら持ったのは、パパのアコースティックギターだった。

慣れた手付きであつという間にチューニングを済ませ、スローテンポな曲を弾き始めた。

何だか切なく、だけど温かい感じのするメロディだ。

何だか今のアタシには子守唄に聴こえるくらいに安らぐ。

アタシはただただ聴き惚れていた。

“うつとり”って、こういうのを言っただろうなって思う。

『かなりお上手じゃないですか！！』

「失礼致しました。」

淡々と、冷静にアタマを下げて言った。

しかし…

200年も未来にもアコギとかつてあるんだねえ…。

って言うか、この人、オールマイティー過ぎ…。

何者なんだよ一体…。

ちよつと、未来のコトが知りたくなっちゃった。

って言うても、神楽サン達のいる、RCSのコトをね。

『部屋に移動しませんか？色々聞きたいです。』

アタシが立ち上がり言つと、神楽サンは柔らかな笑顔で言った。

「かしこまりました。では何か準備してから参りますので。」

えっ!?

いくら何でもさつきから男の人、しかも建前的にはお兄ちゃんってコトになつてゐる神楽サンに、色々やつてもらっちゃってイイのかなあ…。

・・・いつか、末っ子だし!!

強引だなあ、アタシ。

じゃ、洗濯物でも片付けるか。

さすがにコレは女子の仕事でしょ。

神楽サンのコーヒーはホントに美味しいよ。

『お店出来ますよ!』

100%本音で言うアタシに、神楽サンは100%本気で照れていた。

「おやメ下さいませ。」

意外と照れ屋サンなんだね、神楽サンで。

たった2日そこいらだけど冷静沈着ってイメージがあるから、凄くギャップを感じる。

何となく微笑ましく見えちゃうよ。

2人でベランダでコーヒーを飲みながら、アタシは色々質問した。

まずは如月サンの様子を見てからずっと気になっていた、RCSについて。

「分かりやすくこちらの時代風に置き換えてご説明致しますと、皇家が天皇家に相当し、皇王様は天皇と総理大臣を合わせた存在に相

当致します。」

ほう…。

「差し詰め、我々RCSは、警視庁から宮内庁、総務省など、全中央省庁を総轄したセクションと言うコトに値します。」

・・・説明は凄く分かりやすいんだけど、

スケールデカ過ぎ…。

「それだけの重要なセクションですから、RCSはもちろん、アカデミアも全国民の代表とも言うべき立場にございます。それ故、アカデミアから規則やシステムやカリキュラムが大変厳しくなっております。まして、まずアカデミアに入る試験が5次試験くらいまでございます。」

・・・5次。。。

啞然…。

「ちなみに4次までは全て筆記試験でございます。」

はあああああ??????

“呆れ”に近かった。

「最後の面接と筆記試験をクリアした者がアカデミアに入学出来まして、アカデミアに入っただ後は毎月試験がございます。」

聞いてるだけでもクラクラしちゃう…。

「その試験の成績が8割以下ですと不合格扱いになってしまい、一度でも不合格になるとイチからやり直しになります。それはアカデミアを卒業し、RCSに入庁してからも同様でございます。コレが例の“リゲート”でございます。」

出たっつっ！！リゲート！！！！

イチからやり直し…。

そりゃあんだだけ嫌がるのも納得だよ…。

要は留年でしょ？

しかも“イチから”なんて…。

厳し過ぎでしょ…。

鳥肌立つちゃうよ。

しかもそんなエリートの中のエリートに仕えてもらうなんて、どんなだけの存在なのよ、

“皇家”って。。。

恐ろし過ぎて、身構えちゃうじゃない…。

“アタシ、そんなトコに戻らなきゃイケナイの!?” って…。

今からじゃ、まるで嫁ぐようなモンだし…。

はあああああああ。

大きくて、深いため息が出ちゃうよ。

聞かなきゃ良かったかも。

途方に暮れるワ…。

アタシはしばらくの間、遠くを見つめていた。

何を想うでもなく。

ただひたすら…。

no more cry

さすがに昨夜は普通通りに眠れた。

だけど、完全に覚醒しちゃったモンだから、夢に出てきちゃった。

“皇女のアタシ”・・・。

しかもいるハズのない、今のアタシが。

もしいたらこうなってんだろって言う仮定なのか、戻ったらのアタシなのかはわからないケド…。

お陰で、目覚めのテンション、低い…。

バックテンションで準備をして、ちょっとテンションを上げて下に降りる。

お弁当作んなきゃ。

ん？ヤバいっつっ！！

匂いに反応して、慌てて階段を駆け降りる。

「おはよう、妃音。」

神楽サンがキッチンに立っていた。

“妃音”に思わずドキッとしてしまった…。

“ 妃音 ”
だつて
・
・
・
・
・

何だか新鮮。

「おはよう、妃音！」

盛り付けしてる如月サンも“妃音”よばわ、、、

「え え え え え え え ! ? ! ? ! ? ! ? ! ? ! ?

思わず声に出してしまった程の衝撃。

「どうしたの？ 妃音……」

パパとママは啞然としている。

「どうしたの？つて…、」

つい声が裏返っちゃうよ。

アタシがココまで動揺している理由……

『何で如月サンまで修南の制服なんですか？』

如月サンの耳元で小声で訴えた。

如月が来ている制服、アタシと同じ高校のなんだもん！！！！

ところが今回もまた何喰わぬ顔の如月サン。

全く悪びれた様子もなく、サラリと答えた。

「だって同じ学校じゃなきゃお護り出来ないじゃないですか!」

・・・、そりゃそうだけどさあ…。

更にテンションが下がるわあ…。

「チーフは年齢的に高校生はキツイので、修南の大学生と言うコトで。教員も考えたのですが、いざと言うときに動けないとイケませんのぞ。」

これまた悪びれた感が全くないよ…。

深いため息をつく。

どこまでも一緒なんだね、この2人と…。

まあ、この前みたいに1人でいるときに何かあっても困るケドね・・・。

神楽サンの表情も、怖かった…。

結局、男子2人（しかも兄貴のハズの）にお弁当を作らせてしまったアタシは、仕方なく？朝食の準備をするコトにした。

しかし、“イントルード”ってスゴいよな…。

どういうテクニクかはわかんないけど、そのテクニクで、

神崎家の養女で、しかも一人っ子だったハズが3人兄妹になっちゃ
うし、

誰も使ってなかった部屋が突然男子2人の部屋になったり、

今まで3人分しかなかったハズの生活用品や食器が、歯ブラシやお
茶碗や箸やマグカップ、果てはお弁当箱に至るまで5人分になっ
たり、

パパママの中では何の違和感もなく2人に打ち解けてるし・・・。

違和感大爆裂なのはアタシだけで…。

まるで、別の世界にいるみたい。

「行つてきまあす！」

『行つてきまゝっす。』

「行つてきます。」

3人揃つて家を出る。

当然今までは1人だった。

駅に着くまでは。

と言うコトは、乃亜もこの2人をフツーに受け入れるってコト？

何か分かんないけど、ニコニコしてる如月サンに、至ってクールな神楽サンと、アタシ。

如月サンが1人ではしゃいでる。

「何かいいなあ、こう言うの！」

何だか嬉しそう。

そんな如月サンを見て、無意識に神楽サンと目が合っちゃった。

アタシまで嬉しくなりそう！、…って、何でだろ…。

「あっ！神崎兄妹！！」

んんん？

ナニ、この黄色い声は…。

どこからか聞こえてきた。

思わずしかめっ面になる。

「朝から神崎3兄妹見ちゃったよお！」

んんん？？？

ナニ、何だっの！？

何で地元の女子にこんな扱いされてんの???

よりによって“神崎3兄妹”って…。

しかめっ面が直せないよ。

間違いなく犯人であろう本人は、メチャクチャご機嫌な様子。

「兄妹全員神だよね。3人全員修南だし、兄2人は文武両道で妹は生徒会副会長だし、何てったって音楽一家だし。」

おいおい…。

朝からドツと疲れるよ…。

隣の神楽サンの顔が怖くて見れないよ…。

如月サンはちよつと前をご機嫌に歩いてる。

こっちを見てる女子に手を振ったりして…。

「今度こそリゲートだな。」

小声だけど、神楽サンの迫力はハンパ無かった。

『下らな過ぎて、コトバも出ません。リゲートの理由にするにはアホくさ過ぎます。』

アタシは呆れるしかなかった。

「おはよう」

乃亜の姿が見えた。

今までとあまり変わらない様子。

『おは...』

アタシもいつも通りに挨拶しようと思った矢先、乃亜が駆け寄ったのは如月サンだった。

「おはよう」

「おはよう、乃亜！」

またしても啞然…。

しかも乃亜、如月サンと腕なんか組んじやって。

全力で全身のため息が出るよ。

「いかなさいますか？」

神楽サンの声が心なしか震えてる気がする。

アタシは神楽サンを見ずに、ただ首を横に振った…。

電車の中でもウチラの“噂話”は続いた。

ダメだ、音楽聴こ。

下らなすぎだろ…。

今までは何事もなく、フツーに乃亜と話しながら通ってたのに…。

今じゃその乃亜は、如月サンにベツタリ。

アタシ、（神楽サンもだけど）家を出てから何回ため息ついてるかなあ。

見た目は冷静を装ってるけど、神楽サン、内心は相当怒ってるっぽいよ…。

校門を抜けた所で、ちょっと先を歩いていた如月サンと乃亜が立ち止まり振り向いた。

「じゃあね、アニキ！」

「神楽サン、また♪」

2人ともなかなかのハイテンション。

そっか、校舎が別だから神楽サンとはココでバイバイなのか…。

モーレッツなまでの不安感がアタシを襲う。

急に背中が重くなる。

「何かあったらすぐにお呼び下さいね！」

別れ際、神楽サンが耳元で言った。

アタシはただ、頷いて。

昨夜、簡単にリングの使い方を教わったんだ。

神楽サン達が持っているペンダントバージョンとは、ちょっと使い方が異なるらしい。

ちなみにこのアイテムの名前は、“PP”。

“ポータブルパートナー”

だそう。

確かに性能や機能を考えると、十分“パートナー”だよ。

何ていったって、コレ一台(?)で何役もこなしてくれるんだから。

今で言えば、スマホの超進化系ってトコかな。

テレビもケータイもパソコンも出来ちゃうようなモノで。

しかもテレビ電話的な機能に至っては、立体でなおかつ動くしね…。

ただただ驚くばかりです。

2人のちよつと後ろを歩いて教室に向かうと、またしても衝撃的な光景が…。

途中からイヤな予感はしていたよ。

如月サンがいなくなる気配が全然無かったから…。

それどころか、いなくなったのは、違うクラスの乃亜だった。

だからって言ったって…。

「じゃね妃音♪」

何の屈託もない笑顔で自分の教室に向かう乃亜に、アタシはひきつり気味の笑顔でしか返せなかった。

如月サンが入って行ったのは、アタシと同じ教室だった。

やっぱりかぁ…。

またしてもため息が出た。

「おっす!!」

「おはよう如月!」

・・・フツーに溶け込んでるよ。。。

アタシは遅れて教室に入った後、またまたイントロードの凄さを目の当たりにした。

如月サンの席が増えていたのだ。

そこ、別の男子が座ってなかったっけ？

いや、１個ズレてるよ……。

ただただ啞然…。

ってか、ってコトは、アタシと如月サンは双子設定！？

ムチャクチャだろ…。

しかもフツー、双子とかだったら同じクラスになんないんじゃないの？

って言っても、ウチの特進科は完全成績順でクラス分けされるから関係ないか。

席に着き、また大きなため息。

はああああああああ。

まあココでまで乃亜とイチャつかれないダケいつか。

……、

はああああああああ。

やっぱりため息。

覚醒したからこそ思うコトが、ある。

改めて、アタシは“狙われてる身”なんだなって…。

四六時中如月サンや神楽サンに付きつきりになられるのは、確かにウザいよ？。

だけど、“あの時”のコトを考えたら、しょうがないのかなって思うしかなくて…。

アタシ1人じゃどうしようもない事態が今、現実になっている。

ソレも、どうしようもない事実。

はああああああああ。

今日、何回ため息ついてんだろっ。

…、はああああああああ。

思わず窓の外を眺めてしまう。

「行くよ！」

昼休み、乃亜が猛ダッシュでウチらの教室にやって来た。

『えつつつつ？？？』

如月サンもカバンを持ってアタシのトコロにやって来た。

“行くよ”って、??

きょんとんとしてしまっているアタシ。

『ドコに?』

アタシ的には100万%、ホンキの質問だった。

アタシの質問に、乃亜まで違う意味できょんとんしてしまった。

「何言ってるの? 妃音…。正気! ?」

だから100万%正気だつてば、嘘偽りなく。

と、ココロの中で言いながら頷く。

「毎日お昼は神楽サンとセンターホールと一緒にランチしてるじゃない!」

あああああ→???。???。???。

思いっきり顔をひきつらせた。(ココロの中で。)

毎日って、そもそも今日初めて神楽サンと如月サンは修南に来たのよ?

「行くよ!」

また腕なんか組んじやって、ご機嫌でセンターホール（校内の中央にある、全校共通の多目的ホール）に向かう2人の後ろでまたため息。

はあああああ。

!!!!!!!!!!!!!!

ペンダントが、光ってる！！

濃い黄色…。

思わず立ち止まってしまった。

あ、れ？？？

気の・・・、せい？

今、確かに光った気がしたのに…。

何ともなくなっちゃった。

「どうかした？姫音。」

気付いた乃亜が立ち止まり、振り返って声を掛けてきてくれた。

ペンダントを見つめたままフリーズしていたアタシは、慌てて何事も無かったかのように2人のトコロに駆け寄った。

『何でもナイよ、大丈夫。ごめん、行こ行こ。』

あえて何も無かったかのように笑顔で。

不審そうな如月サン。

笑顔を見せて、右手で“OKサイン”を作った。

でもその後、またペンダントに目が行っちゃったケドね…。

何だろう、黄色って…。

しかもホンの一瞬…。

センターホールに着くと、神楽サンが席を取って待ってくれていた。

爽やか過ぎる笑顔にちょっとダケやられそうになりかけた…。

いやいや、あり得ないっしょ。

建前的には“お兄ちゃん”だし…。

4人でテーブルを囲んで食事しても、やっぱり乃亜は如月サンとイチャついてる。

またしてもため息。

自由だな、この2人は…。

なんて思いながら。

「妃音様、どうかなさいましたか？」

如月サンと乃亜が2人で盛り上がってるのをイイコトに、神楽サンは耳元で小声でとは言え、妃音“様”呼ばわりで声を掛けてきた。

『えっ！？』

きょとんとしてしまうアタシ。

「先程からストーンを気になさってるようですが。」

!!!!!!!!!!!!!!

目が飛び出そうになった。

完全に無意識だったから。

うわああああ。

ひたすら後悔の念。

『何でもないデス。』

うつ向き気味に答えた。

自分の分かりやすさにちょっと恥ずかしくなってみたりして…。

気を付けよっと。

「今日は放課後は何かございますか？」

サラッと話題変更。

またしても小声で。

『ハイ。生徒会が。』

アタシも小声で。

「では、終わりましたらご連絡下さいませ。」

穏やかだよなあ、神楽サンで。

雰囲気も物腰も。

『ハイ。』

こんな調子で言われたら、否応なしにおとなしく言うコト聞いちゃ
うもんな…。

ヤバイヤバイ。

気を付けなきゃ。

．．．．放課後。

如月サンの存在を忘れてたワケではなかったんだけど、つい小さい頃のクセで何の気なしに如月サンを完全スルーで教室を出してしまった。

「妃音！」

呼び止められて気が付いたよ。

『あつ！…ごめんな、、さい。そう言えばそうで、…だったね。』

気を抜くとすぐつい敬語になっちゃうよ。

たどたどしい日本語みたいになってるよ。

『でも、生徒会で…、だよ？』

妃音↓↓↓↓↓↓！！！！！！

自分を責める。

学習能力無さすぎ！！

「大丈夫！」

そう言っつて、ハイテンションで前を歩いて生徒会室に向かっていった。

はあああああ。

もうどうにでもなってくれ!!

勝手にしてくれ!!

結局如月サンはただの“居候”的なカンジで、何をするでもなく、生徒会室の隅っこで黙って雑誌を読むダケで、特に誰も何も突っ込むコトもなく、終わるまでずっといた。

如月サンに気付かれないように、ちょいちょい如月サンの目を気にしながら、やっぱり何度となくストーンに目をやっていた。

やっぱり“アレ”が気になっちゃって…。

今のところ、あれっきり立ったケドね。

「じゃ、次は…」

【妃音…】

!!!!!!!!??????

思わずカラダが動いてしまった。

また誰か呼んだ？

『ハイ?』

アタシのリアクションに、みんなホンキのドン引き。

ヤバ・・・。

みんなの視線が痛かった。

『・・・ごめん、なさい。』

思いっきりひきつり笑い。

背後の如月サンが怖くて、振り向けなかった。

ほっとうつと。

もおおおお！！！！！！

軽くノイローゼになるよ。

そう言えば・・・、

あまりの驚きに確認出来なかったケド、ストーンってどうなったんだろう…。

何色かに光ったのかなあ。

それにしても・・・。

誰の声？

男の人の声っぱかったけど…。

その後の打ち合わせは、イマイチ集中出来ないでしまった。

「じゃあな、如月！」

「おう！！」

やっぱりフツーに溶け込んでるよ、この人…。

つてか、今までは終了後は流動的にみんなで帰ってたのに、みんな先に帰り始めてるよ。

「じゃあね、神崎！」

ええええ！?!?!?!?

貴重な女子仲間の先輩まで??????

はああああ・・・。

またまたまたしてもため息出ちゃったよ…。

今日ダケでアタシ、人生でつくであろうため息の何割を消費したのかなあ。

相当いつてるよ？

どんだけアタシ、如月サンの“イントロード”に振り回されてんのよ！……！！

今更とは言え、やっぱりリゲートさせときゃ良かったかも・・・。

「妃音、様？」

周りを気にしてなのか、様を小さく言ったのがおかしくて笑っちゃった。

『ハイ？』

軽く笑いながら。

「さっき、何かあった？」

ドキッ！

軽く動揺…。

『何が？』

何事も無かったかのように見せてる（つもり）。

「何でもないならイイ。…です。」

ふううう。

如月サン、可笑しすぎる！！

語尾だけメチャクチャ小声なんだもん。

「笑わないで下さい…。」

うつ向きながら、小声で呟いた。

『ごめんなさい。』

コレが笑わずにいられるかつての。

だけど、そりやワケわかんなくもなるワな。

まあ、自分が蒔いたタネなんだから、アタシは1人で楽しもುತ್ತと
♪。

生真面目な神楽サンはきつと、カンペキに使いこなすだろうから。

外に出ると、神楽サンが直立で待っていた。

まさか…

『ずっと立って待ってたの？』

まさかとは思うモノの、神楽サンのコトだから有り得なくもない。

「今来たトコ。」

さらりと笑顔で。

良かった…。

しかも、やっぱり自然にタメ口。

この人のスゴいのが、

「ご安心下さいませ。」

昼休みもそうだったけど、

タメ口↓周りに人がいて、普通の声量で。

敬語↓ウチらダケの時もしくは、周りに人がいても小声で。

コレを見事に器用に使い分けてる。

感心するよ。

!!!!!!!!!!!!!!

「いつ……たあ……」

思わずアタマを抱えてしまうほどの頭痛が一瞬ダケ襲った。

「妃音？」

すかさず神楽サンが呼び掛ける。

「大丈夫？」

如月さんも。

大丈夫。最近いろいろあったから…。

この理由、まんざらでも無いと思うよ。

それにしても…

何なのよ。

あつ、ストーンは??

・・・光ってない、かあ。

見えなかったダケかも知れないケドね。

でも、何も脳裏には浮かばなかったよ?

単純に頭痛ダケ。

何なんだろ。

意味もなく、ずうっとストーンをただただ見つめていた。

別に答えが出るワケでもなく、出ると思ってもなく、ただ眺めていた。

「神崎兄妹だよ!」

帰り道でもやっぱり…。

聞こえてると思って言ってるのか、聞こえないと思って言ってるの

かはわからないけど、ウザいわああ…。

帰り道に、近くのスーパーに寄った。

今までも、バイトがある無に関わらず、アタシが買い出しをしていた。

と言っても、バイトしていた店ダケに、どこか辛い。

足取りが心なしが重くなっていた。

「妃音はアニキと先に帰ってて。オレ買い出ししてくるから。」

えっ！？

如月サンはアタシが持っていた買い物用マイバックを奪い、爽やかに颯爽と中に入っていた。

思わずぽか～ん。

「如月なりの気配りでしょう。アイツは、ああ見えて、実は誰よりも人の気持ちに敏感なんです。妃音様の動揺を見抜いたのでしょう。」

き…、さらぎ…サン。

ちょっと胸が熱くなった。

「アイツは表向きはお気楽でお調子者ですが、実は誰よりも孤独で、寂しがり屋なんです。」

如月サンに“先に帰ってて”と言われたものの、近くの公園で待つコトにした。

2人で缶ジュースを飲みながら。

「アイツはオレと全く正反対に見えますが、どこか似ているような気がする。」

『ええええええ！?!?!?!?!?神楽サンと如月サンがあ??』

意外、

と言っしか無かった。

「上手くは言えませんが、何と云うか…。完全にインスピレーションですが。」

ちよつと照れ臭そうに言う神楽サンもまた、意外だった。

「アレ?待っててくれてたの!?!ありがとう!?!」

気付いた如月サンが駆け寄ってきた。

「持つよ。」

神楽サンがスツと手を差し出した。

ためらい戸惑う如月サンの片方の荷物を神楽サンはゴーインに奪い取って、

「帰るぞ！」

と歩き出した。

「は…、ハイ！」

ぷつつつ！

思わず本音で敬語になっていた如月サン。

また笑っちゃった。

3人で夕食準備。

何となくだけど、イイな、こう言うのも。

いつの間にか用意された三者三様のエプロンが一層、ほのぼのさを醸し出していて。。。

今まで無かったコトだからね。

それにしても、ホントに未来人なのか？この2人…。

「段取り等はやはり未来の方が格段に便利で進歩しておりますが、基本的に手料理は致します。」

はあああああ。

アタシが2人の手際の良さに見とれていたのに気付いたのか、如月サンが自ら説明してくれた。

「アカデミアでもやらされますから。」

と続けて。

そう言えば昨日、神楽サンが話してくれたっけ。

アカデミアでどんなコトをするのか。

聞いているだけでもアタマが締め付けられそうになるようなお堅い内容の講義ばかりで。

琉按星の歴史や地球の歴史、宇宙の歴史、琉按星の国内情勢、他に人が住む数々の惑星の情勢、皇家のしきたり・マナー、皇家についてはもちろん、

皇家に仕えるに値するべく、身辺のお世話をするにあたって、

果てはこの時代にいるアタシには到底理解不能な、いかにも2世紀も未来だなんて思わざるを得ないようなパラレルな内容まで。

聞いている最中から重くいため息が出てたよ。

に、しても、スゴいわ、この2人。

この2人みたいな人達がわんさかいるのかと思うと、どこことなく気が重い。

“こんな人達が仕えるくらいなんだから、仕えられる方はよっぽど
格式が高くないといけないんだよね…”

なんて考えちゃって…。

!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!

痛↓↓↓↓↓↓↓↓↓↓↓い!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!

また激痛。

思わず持っていた皿を手放してしまった。

皿は幸いスリッパに当たったお陰で割れずには済んだんだけど…。

「妃音様!?’」

「大丈夫ですか??’」

2人の反応は驚異的な早さだった。

しかもほぼ同時に。

今回は“大丈夫”って、嘘にも言えなかった。

返事すら出来ない。

完全に、割れ“そう”な痛みじゃなく、割れ“た”ような痛みで。

しばらくうつずくまってしまった。

「お休みになりますか？」

痛みの余り、声がボヤけて聞こえる。

多分、神楽サンの声だと思う。

でも、やっぱり反応出来ない。

「失礼致します。」

えっ!？

そう言つて神楽サンは自分のPPをアタシの手首にかざした。

何？

「脈が不安定ですね。心拍数は問題なく。ちよつと熱があまりのよ
うで…。如月、bossにNV3821を依頼してくれ。」

「かしこまりました。言つて参ります。」

ええええええ!!!???

そんなコトわかつちやうの?PPをかざしたダケで!?!?。

「只今お薬をお持ち致しますので少しお休みになって下さい。準備
の方はワタクシにお任せ下さいませ。」

神楽サンの神通力ですら、今回ばかりは通用しなさそうだよ。

何なんだよ、この痛み…。

今回の痛みも、ただの痛みだけ。

その痛みが尋常じゃないけど…。

『かぐ・・・ら、、サン？』

神楽サンに抱き起こされながら、たどたどしいながらも聞いてみた。

「ご無理なさらないで下さいませ。」

神楽サンの声が、どことなく痛みを和らげる。

コレもちよつとは“神通力”なのかな??。

『ストーン…、どうかなってましたか?』

またチェックするの忘れちゃってたから。

「ワタクシには何の変化も無いように見えました。」

そっかぁ・・・。

一瞬しか光らないだとしたら、見えてなくても仕方無いよな。

「無理にお答えにならないで頂きたいので手振りでお答え頂きたいのですが、先程から頭痛が連発なさっておられませんか?」

やっぱりこの人の声には癒しの効果があるみたいだ。

少しずつだけど、ラクになってきてる。

指で〇を作る。

頷くのもツライから。

「頭痛ダケじゃなく、今日はしきりにストーンを気になさってます。

」

如月サンが戻ってきた。

あちやあ・・・。

「とりあえずこちらをお飲み下さい。」

えっ！？薬って…？コレは・・・。

神楽サンが差し出してくれたのは、見るからにSMPだった。

受け取るのをためらってしまう。

「妃音様の現在の体調に合わせたSMPにございます。ラクになるハズです。」

はあああああ…。

感嘆？

驚愕？

呆然？

痛みのせいでワケわかんない感情になつてゐる。

そんなんまで出来ちゃうの？このドリンクは…。

とりあえず飲んでみよう。

どうやらいつの間にか眠っていたらしい。

リビングのソファで寝ていたアタシは、キッチンからしてくる、
とてつもなくイイ匂いにつられて目が覚めた。

「大丈夫？姫音。」

『あつ、ママ！おかえり。ゴメンね気付かなくて。』

キッチンにママの姿が増えていた。

ゆっくり起き上がる。

「如月に聞いたわよ、今日ずっと調子悪かったって。大丈夫？」
メチャクチャ心配そうな顔をしてくれる。

『うん。大丈夫！！寝たら少しはラクになってきたから。』
立ち上がり、キッチンに向かった。

「イイよ妃音。もう少し休んでなよ。今日はオレらに任せて。」
おっ！！如月サンがスルツとタメ語で言ってる。

『大丈夫だよ！このくらい。』

笑顔で答えて食器の準備を始めた。

「無理しないでね。」

優しすぎる笑顔と声の神楽サンに、ドキドキしそうになっていた。

何してんのよアタシ！！！！

よりによって神楽サン相手にドキドキなんて。

でも、

・・・珍しいよ？。

アタシが男の人にこんなにドキドキするなんて。

アタシ、乃亜に天然記念物扱いされるくらいに異性を恋愛対象として見ていないの。

未だかつて。

男性恐怖症、

とか、

男性には興味がない、

とか、

一途に想い続けている人がいる、

とかではない。

“ドキドキ”とか、

“トキメキ”がないの。

だから、

正直、

この“ドキドキ”が、

何の“ドキドキ”なのかは、わからない。

ただ、

乃亜がしょっちゅう言ってる“ドキドキ”って、

こういうコトを言ってるから、

あくまでも、アタシの勝手な勘違いだと思うけど…。

勘違いだと思おう。

記念すべき人生初の“ドキドキ”の相手が、

よりもよって、

自分に仕えるエージェントだなんて、

笑うに笑えないから…。

moon and the memories

真っ白な砂漠。

空は紺碧。

どこまでも続いている。

【妃音…。】

日中、生徒会室で聞こえたのと同じ声だ。

コレって、夢・・・だよなぁ。。

【妃音…。】

まただ！！

えつつつ????

視界の隅でストーンが光ってる。

黄色だつつつ→→→

さっきと同じだつつつ→→→→→

でも、すぐ消えた。

痛つつつつつ!!!!!!
←←←←←

一瞬、0・幾つってレベルのホントの一瞬の激しい頭痛があった。

何で夢の中でまで頭痛が襲ってくんのよ!!!

【妃音…。】

まただ。

すかさずストーンに目を向ける。

やっぱり光ってる…。

黄色に。

無意識的に構えてしまう。

“あの”激痛に対して…。

幸い、今度は痛みは無かった。

痛みが無いウチに、少しずつゆっくりと歩き続ける。

空は星も何もなく、辺り一面紺碧。

地面はどこまでも続く真っ白な砂漠。

それ以外何もない。

しばらく歩き続ける。

【妃音…。】

!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!

立ち止まらずにいらなかった。

今度は声と同時に痛みが来た。

痛みが収まり、閉じていた目をゆっくり開けると、景色が変わっていた。

夢で見て、如月サンも神楽サンも教えてくれた、“皇邸の庭”が目の前にあった。

幼い子供が2人。

何人かの大人が2人を見守っている。

・・・まさか、、

お兄、、様????

と、アタシ・・・?????

幼い頃の、

アタシとお兄様・・・。

思い出した。

アタシには“ホンモノの”お兄様がいたコトを。

2つ年上の。

今の今まで思い出せなかったのに…。

いつも優しくて、怒られた記憶が無かった。

（って言っても3歳になったその日までの記憶だけだね。）

まさか“あの声”、お兄様の声!?

お兄様なの?!?!?!

目の前のお兄様とアタシは周りを囲むエージェント達の中で、無邪気に遊んでいる。

エージェント達も2人を微笑ましく見つめている。

お兄様が突然アタシの手を掴んで走り出した。

「りゅうが琉雅様!?!」

エージェントが慌てて呼び止める声も聞かずに走り続けるお兄様。

アタシはただつられて走り続ける。

アレって、、プラチナムマウンテン・・・？

クリスタルに耀き、悠然と、また毅然と、そして燦然とそびえる山。

琉按星の守護山、

プラチナムマウンテン

そのすぐ側に皇邸がある。

お兄様はマウンテンの方向に向かって走っていた。

「お待ち下さい琉雅様！！」

わずか2歳と4歳の子供の走るスピードに、何故か大人であるエー
ジェント達が追いつけないでいる。

何度も呼び止めるエージェントの声に耳を貸さずひたすら走るお兄
様とアタシ。

さすがに足がもつれてきて、アタシが先に転んでしまった。

手を繋いだままのお兄様もつられてバランスを崩し、倒れ込んでし
まう。

2人ともヒザを痛そうに抱えている。

泣きたいのを我慢しているアタシ。

えっ！？

・・・何で？？？

エージェント達は、全員幼いアタシに駆け寄っていた…。

お兄様付のエージェントだっているハズなのに・・・。

今、この状況を冷静に、客観的に見ているアタシは、

見てしまった。

そこにいる全てのエージェントに心配そうに介抱されている幼いアタシを見つめる、

何とも表現しようのない、複雑な表情のお兄様を。。。。

.....

目が覚めるといつもの見慣れた、自分の部屋の風景があつた。

アタシはしばらく放心状態で、目の前の天井をただ眺めていた。

あのお兄様の表情……。

絶望

落胆

悲哀

悲壮

失望

諦め

呆然

憂愁

愕然

怒り

驚愕

とてもコトバで言い表せられるようなモノではなかった。

あのお兄様の表情は、アタシの脳裏に焼き付いて離れなくなってしまうていた。

目覚めたのはまだ夜明け前で、星がまだ見えていた。

アタシはベランダへ出た。

「お体の具合が優れませんか？」

えつつつ！？

ベランダにアタシが出て間もなく、神楽サンが部屋から出てきた。

『神楽サン、、、どうして？』

驚くしかなかった。

「妃音様の状態はセキュリティの関係上、離れていてもある程度は把握出来るようになっております。」

何だかモーレッツに泣けてきたよ。

「妃音様！？」

さすがの神楽サンもうるたえる。

『ごめんなさい。』

安心してなのか、泣けてきちゃって…。

「何か温かいお飲み物でもお持ち致しますか？」

こんな時だから、尚更神楽サンの優しい表情と声がたまらない。

アタシはゆっくり頷いた。

「かしこまりました。只今お持ち致します。」

すぐにいなくなった。

アタシはストーンをジッと見始めた。

このストーンを持つ者が皇位継承者。

男女、出生順関係なく…。

だからって、あんな差別…。

そりゃアタシは引つ張られた側だし、先に転んだし、妹だし、年下だし、……………。

って言ったって、何も全員アタシに来なくても。。。

お兄様付のエージェントくらいお兄様に駆け寄るべきなんじゃないの！？

しかもまだ2人とも幼いコドモだよ???

お兄様はずっと、あんな孤独を抱えていたの？

また泣けてきた。

今の今まで思い出せなかったけど、思い出したお兄様の記憶は、
優しい”と“笑顔”しか無かった。

あんな表情、記憶にないよ。。

「お待たせ致しました。」

速つつつ!!!

しかもこの香りは!!

神楽サンの十八番♪

“神楽珈琲”（アタシが勝手にそう呼んでいるダケだけどね。）だ
つつつ!!

カフェオレだからなのか、ちょっといつもよりは香りに反応しなかったケド…。

『ありがとうございます。』

ゆっくり口にする。

・・・、美味しい→♪やっぱり…。

落ち着くな。。。

ただひたすら、星空を眺めながらぼんやりしていた。

神楽サンは何も言わず、そっと側にいてくれた。

『ごめんなさい！！立ってないで座って下さい！！』

つつい星空に集中しちゃってて、神楽サンがずっと立っていたコトに全然気付かなかったよ。

慌てて促す。

・・・、いや、待てよ…？

ってか、違うだろ！！

『いや、もし何なら寝て下さい。具合は大丈夫ですから。』

先にこつちを言うべきだった…。

「ご配慮大変感謝致します。どうかお気遣いなさらずに。」

ひゃあつつつ！！！！

ヤメて！この“キラースマイル”…。

また勘違いしちゃうじゃないのよ!!

直視出来ないよ…。

カフェオレを飲んでごまかす。

「失礼致します。」

ん?…、あつ!

『どうぞ。』

神楽サンが隣に座った。

ベンチの幅のせいもあって、ビミョーな間隔。

………、あゝ、れ?????

こんな精神状態の時に何だけど、

ふと気付いた。

こういうの（隣に座られる）とかは、ドキドキしないんだな、アタシ。

じゃあやっぱり勘違いなんだね。

乃亜はいつも、

“「目が合っちゃった」”

とか、

“「スレ違ったダケでドキドキしちゃう！」”

とか、そりゃあもうとにかくコーフン気味に話してるもんな。

・・・乃亜が極端なダケかも知れないケドさ。

アタシは・・・・・・・・、

違うな、やっぱり。

きつと“ドキドキ”慣れてないから、勘違いしてるダケなんだな。

「お加減はいかがですか？妃音様。」

ドキッ！！

ビックリしたあ…。

単純に、急に話し掛けられたって驚き。

『ハイ。お陰様で。』

精神状態はちつとも宜しく無いケドね。

「偽りは、ナイですか？」

ド
キ
ド
キ
ド
キ
ド
キ
ド
キ
↓
↓
↓
↓
↓
ン
！
！
！
！
！
！

ゆっくり、諭すように言われたモンだから、動揺せずにはいらなかった。

「はい、いいえ。」

今アタシ、ウソ発見器に掛けられたら間違いないくアウトだな。

神楽サンの目を見れない。

「くれぐれもご無理はなさらないで下さいませ。」

ダメだ、

この声にして、ウソはつけない。

涙が込み上げてきた。

あのお兄様の表情が離れなくて。

「妃音様??」

神楽サンの声が慌ててる。

首を横に振る。

何なんだろう、このモーレッツな安心感は……。

“アタシの癒しのツボ”は、神楽サンの声に激弱なようだ。

「いかなさいましたか？」

優しく肩に手を掛けてくれる。

そつとさりげなくハンドタオルまで差し出して…。

どこから出てきたってのよこのタオル！！

つて、ムダに冷静に思いながらも思わず受け取る。

『ありがとうございます…。』

皇家のエンブレムの刺繍入りのハンドタオル。

今さらどうってコトないハズなのに、今日は特別に反応してしまう。

エンブレムを食い入るように見てしまって。

「妃音様？」

素直に不思議そうな雰囲気的神楽サンの声。

けど、

すぐに反応出来なかった。

また今の声で泣けてきちゃってるから…。

何も答えられないままで、アタシは空を仰いだ。

空はうつすら夜が明け始めていた。

アタシはしばらくそのままだった。

ただぼんやり空を眺めて。

神楽サンも黙ったままで、何を聞いてくるワケでも話してくるワケでもなく、ずっと隣にいてくれて。

穏やかな時間だけが流れていた。

「えっ？あっ！おはようございます妃音様、チーフ。遅くなって申し訳ありません。」

あの後寝れなかったから、2人でいつもよりは早めに朝食&お弁当準備を始めたんだ。

そしたら如月サンが慌てちゃって。

「気にするな如月。遅くなどない。」

ハナで笑いながらただ一言神楽サンがそう言うから、アタシも笑顔で頷く。

『早く目が覚めちゃって、その後眠れなくてソレに神楽サンが付き合ってくれてたダケだから。』

神楽サンに続いたアタシのコトバに、神楽サンも優しく頷いていた。

「申し訳ありません。」

そうは言っても、どこことなくバツが悪そうな如月サンだった。

「おはよう。」

「おはよう、みんな。」

パパとママが登場。

あ、れ？・・・

めまいが…。

寝不足かな。

今、ちよつと揺れた気がした。

ふう…。

軽くため息。

「どうかした？」

とママがすかさず。

『大丈夫。』

笑顔で返す。

「頭痛ですか？」

小声で神楽サン。

『めまいなんで寝てないせいだと思う。』

あまりひそひそ話も怪しいから、アタシは普通のトーンで。

『だから後でSMP下さい。』

コレは小声で神楽サンに言った。

神楽サンはただ笑顔で頷いてくれた。

出たよ、キラースマイル。

寝不足には尚更堪えますわぁ…。

このキラースマイルでもめまい起こしそうだよ。

「妃音様、よろしいでしょうか。」

部屋で準備していると、廊下の方から神楽サンの声がした。

『ハイ、どうぞ。』

神楽サンと如月サンが準備を終えて中に入ってきた。

「SMPをお持ち致しました。念のため寝不足用に処方して頂きました。」

『ありがとうございます』

“寝不足用”って…。

そんなもあるんだ。

ノーマルなので良かったのに。

SMPって何にでも対応出来ちゃうんだね。

受け取ろうと立ち上がる。

あれっ？

まただ…。

立ち上がった拍子に軽くふらついちゃった。

立ち上がって左足が床についた時に力が入らなくて。

「妃音様！」

2人同時に手を掛けてくれた。

『大丈夫です。やっぱり寝不足ですね。』

照れ笑い。

神楽サンはしかめっ面、如月サンはアタシにつられてなのか苦笑い。

「失礼致します。」

しかめっ面のまま、神楽サンはアタシの手首に自分のPPをあてた。

思わず動揺してしまう。

「異常はございませんね。申し訳ありません、思い過ごしでございました。お顔の色も優れないように感じましたので。」

安心したような表情で言った。

アタシも思わずひと安心。

やっぱりただの寝不足よ。

自分自身にそう言い聞かせて。

.....

おかしいなあ…。

めまいが治らない。

頭痛はすっかり良くなったのに。

通学途中にも、度々ふらついちゃって。

その都度神楽サンに心配させちゃって。

「もう一度お調べ致しますか？」

なんて心配まで。

“「一応念のためこちらをお持ち下さい。」”

そう言っただけに、ケースに入ったサプリのようなものをくれた。

「あまり続くようでしたらお飲み下さい。」

って。

神楽サンが言うには、SMPはあくまでもドリンクで、即効性はあるものの、錠剤程ピンポイント的に効果はないんだって。

だから、一応って、錠剤をよこされたの。

だから、休み時間に飲んでみたんだけど…。

ダメだ…。

寝不足が原因じゃないのかなあ。

「大丈夫？」

昼休み。

如月サンが心配してくれてる。

『うん。』

ゆっくり、しっかり机に手をついて立ち上がる。

「どうかしたの？」

乃亜がやって来た。

『なんか今日めまいがひどくて。』

アタシのコトバに、乃亜は男子もいるってのにあっけらかんと言いつ放った。

「妃音、そろそろじゃなかったっけ？」

「えっ!？」

戸惑う如月サン。

その如月サンの様子を見て動揺するアタシ。

いくら何でも男子の前で言わなくても…。

「行こっ！」

悪びれた感、皆無の乃亜。

ま、いつか。

『行こ行こ。』

この勢いに委せてさりげなく流そう。

移動中も揺れてる感覚は消えなかった。

まっすぐは歩けてるんだけど。

「錠剤はお飲みになりましたか？」

こっそり神楽サンが耳元で。

小さく頷く。

「今日、放課後は？」

『今日は何もない。』

“です”って危なく言いそうになっちゃっよ。

「じゃあ終わったら工学部棟の機械工学科第2倉庫に来てくれる？」

えっ！？

ちょっと驚いた。

誇らしげに、かつ含み笑い気味に言う神楽サンになワケではなく、

昨日、放課後どこで待ち合わせるかって話をした時に、血相を変えて

“妃音様をお待たせするなど言語道断！！ワタクシが高等部にお迎えに参ります！！！！”

って言うって高等部玄関で待っててくれたのに、

“工学部棟に来て”

って言うてきたのが驚き。

『わかった。』

戸惑いながらもとりあえず返事した。

何だろ、何か言いたげなあの神楽サンの表情…。

ま、放課後を楽しみにするか。

．．．．．6 限目、

アタシはモーレッツな睡魔と闘っていた。

やっぱり乃亜の言う通り、“そろそろ”なせいかな。

食後だし。

って言っても、こんなコト今まで無かったのにな…。

それにしても眠う。

あくびをこらえるのに精一杯だよ。

ダメだ、堕ちそう…。

気が付くとトリップしてる。

ヤバイ…。

限界だ…。

えっ？ドコ？ココ…。

アレはお父様とお兄様？もしかしてベッドの上にいるのはお母様？

抱かれているのはアタシ？

あ、つつつ→→→

首元にペンダントがある。

ってコトはやっぱりアタシ？なんだね…。

産まれた時のアタシってコトなの？。

コレ、どうなってるの…？

「後継者が産まれてくれて良かったな。コレでひと安心だ。」

満面の笑みでお父様が言った。

「琉雅、お前はこの子を妹として、また後継者としてしっかり護ってくれよ。いずれはこの子がこの星の皇になるんだからな。」

えっ……。

こんな小さい子にそんなコト言われても…。

「ハイ、お父様！」

元気よく、お父様の目をしっかりと見据えてお兄様は大きな声で返事した。

この時って、お兄様、わずか2歳だよねえ。

そんなコにんなコト言われても…。

きゃっつっ！！！

突然閃光が走った。

風景が変わった。

お兄様の部屋？

お兄様がエージェントの人と何やら話している。

見たところさつきよりは少し時が経ったっぽいなあ。

「ねえ、どうして妹なのに妃音様って呼ばなきゃいけないの？」

お兄様がエージェントに言った。

えっ っつっ！?!?!?

お兄様が、アタシを“様”呼ばわり????

一瞬ダケ、血の気が引いた気がした。

「妃音様は琉按星の次期皇位継承者様だからです。」

淡々と答えるエージェントサンに、お兄様は何とも物憂げな表情で

「ふっん。」

とダケ答えていた。

アタシは胸がモノ凄いい勢いで締め付けられた。

昨夜の夢で見たお兄様の表情と同じ様な気がして…。

まさかお兄様はこんな時から“孤独”を感じてたつての???

「どうして妃音様が後継者なの？」

ドキ↓↓↓↓↓↓↓↓↓↓↓↓↓↓↑↑↑↑↑↑↑↑↑↑↑↑

胸が“締め付けられる”と言うよりは、

“握り潰される”と言った方が正しいかも知れない状態に今、アタシはいるかも知れない。

見るに堪えない。

「ソレは、プラチナムマウンテンが妃音様を後継者としてお選びになったからです。」

エージェントサンはゆっくり優しく話しているけど、2、3歳のコドモにんなコト言つたつて…。

ひゃつつつ→→→

また閃光が。

えっ?????????

教室に戻ってる…。

「この方程式は、・・・」

えっ?・・・

ええええええええええ? ????????

コレ、アタシが堕ちる前にやってた内容じゃない?

絶対そうだよ!!!

左右の人のノートと教科書を覗きこむ。

・・・変わってない。。。

イツ ア アンビリーバブル!!!!!!!!!!!!!!

「どうした神崎妹。」

キヨドるアタシに気づいた先生が、声を掛けてきた。

『すいません！何でもないです。』

ってコトはアタシは寝てないの！？

ホントの意味の“トリップ”しちゃってたっての？？？？？

どついうコト？？？？？

「大丈夫？妃音…。」

休み時間、如月サンがすかさずアタシのトコロに来た。

『何でもないよ。ちょっと寝ちゃってた！』

ごまかし笑い。

「・・・、そつ。」

呆気なくその一言で交わされた。

・・・。7 限目、

茫然自失状態のままで、それでも何とか出来る限り授業をこなした。

当然アタマの中はさっきのコトでいっぱいだったけど…。

あの夢の内容、

あの出来事の謎、

昨夜の夢のコト、

どれも考えれば考える程おかしくなりそうで。

あのお兄様の表情と、昨日聞こえてたアタシを呼ぶ声が焼き付いて離れなくて。

ホームルーム中も茫然自失状態は全く収まらなくて。

「妃音…？まだ眠いの？顔色、悪いよ？」

気が付くと如月サンが目の前に立っていた。

「えっ……、あっ…。」

「大丈夫？」

めちゃくちゃ眉間にシワ寄せてるよ如月サン…。

「大丈夫。」

精一杯の笑顔で返事し、ゆっくり立ち上がった。

工学部棟に移動中も、アタシのアタマの中は“あの事”だらけで。

「妃音、ホントに大丈夫？ウソついてない？」

如月サンがアタシの顔を覗きこむ。

『えっ？？？』

「何か隠してるでしょ。」

ドキ↓↓↓↓↓↓↓↓↓↓。。。。。。。

『してないよ！大丈夫。眠いだけだってば。』

精一杯作り笑い。

如月サンの表情はどうみても、納得してなさそうだった。

――工学部棟

学祭の時以外では初上陸。

挙動不審になってしまう。

「おう、神崎兄妹！！」

えっ！？ココでも！！？？

工学部生サンに声を掛けられる。

如月サンは何のためらいもなく挨拶を返している一方、アタシは躊躇いまくり。

とりあえずアタマは下げて。

「あつ！神崎弟と妹よ。」

工学部の少ない女子サンからも言われる始末…。

まあ、如月サンは当然手なんか振っちゃって返してる。

アタシはやっぱりひきつりながらペコリ。

そんなこんなで指定された倉庫に到着。

いないよ？

「神崎なら外にいるよ。」

外？

「ありがとうございます」

何も言わずに気づいてくれた工学部生サンに挨拶し、倉庫を素通りし外に向かった。

「チ！・・・アニキ！！」

ぷつつつ！！

今、間違いなく“チーフ”って言い掛けたな。

神楽サンは、工学部機械工学科。

周りにはみんな機械いじりしてる。

神楽サンは車をいじっていた。

「おう！お疲れ！！」

ドキ↓↓↓↓↓ン…………

これまたたまらない“キラースマイル”。

「オマエはアレ。ちょっと動かしてみろよ。」

とびきりの笑顔で後方のバイクを指差した。

「えっ？」

嬉しそうにバイクに駆け寄る如月サン。

作業の手を止めて如月サンの方に向かいながら話し始めた。

「廃車同然のを教授が下さってカスタマイズした。すぐにでも乗れるぞ。」

「マジスカ！！！！！！」

かなりコーフンしてるよこの人。

「もちろん高校生なんだから原付だからな。」

・・・ぷぷう…。

吹き出し笑いしちゃった。

“「高校生なんだから」”

って言い方が、いかにもわざとらしくて。

「やっと妃音が楽しそうに笑ってくれた。」

えっ・・・。

そんなコト言われたら如月サンにまでドキッとしちゃうじゃないのよ！

不覚にも程があるワ、アタシ…。

しかもこんな時に。

でも、少なくとも今のこの数分は、“あの事”忘れられたよ。

2人に感謝しなきゃねっ。

“誰よりも人の気持ちに敏感なんです”

ふと、神楽サンが前に言ってたコトバを思い出した。

ちょっとドキッとしてみたりして…。

最近、この2人と出逢ってからなのか、気持ちが敏感になってんのかなあ。

自分の素性が解ったせい？

この2人がアタシのエージェントだから動揺しちゃってるだけ？

・・・だな、きつと。

だから神楽サンに対するドキドキもソレだな。

そもそも“様”呼ばわりされてる時点でドキドキしちゃうし、緊張もしちゃうもんな。

そうだ！！そうだよきつと！！！！

「そう言えばめまいは治まったの？」

ドキ↓↓↓↓↓ン←←←←←

「何かずつと様子がおかしかったよ。何言っても“大丈夫、寝不足だから”しか言わなくて。」

おい如月いいいい！！！！

心の中で絶叫。

顔は思いつきりひきつり顔で。

『大丈夫だってば。もう何ともないもん。』

思いつきり作り笑い。

「妃音様！！」

ドキ・・・・・・・・・・・・・・・・イン・・・・・・

神楽サン、迫力有りすぎい…。

しかも“様”だしいい。

『ないですよ。』

迫力に押されて思わず敬語になっちゃってる。

めまいはないよ。

だからあながちウソじゃないよ？

外が薄暗くなってきたても、神楽サンは夢中で車いじりを続けた。

出逢ってから一度も見たコトのない、

“ココロの底からの、ウソ偽りのない無邪気な笑顔”

だった。

「チーフが上に行かない理由が解った気がします。」

エツ？

神楽サンに言われて缶コーヒーを買いに言っていた如月サンが、微笑ましい笑顔で神楽サンを見ながら、戻ってくるなり切り出した。

言いながら見ている如月サンの表情も、ウソ偽りのない嬉しそうな表情で。

「ハイ妃音様。」

いつの間にか如月サンも遣い分けてる？

『ありがとうございます』

日々の補習のせいで進化したのか？（偉そうなアタシ）

「チーフは、“伝説のエージェント”なんです。」

伝説のエージェント？

「エージェントになるには、ハンパない程のハイレベルな試験をハイレベルな点数で一度も落とすコトなくクリアしてこななければなりません。」

『神楽サンから聞きました。アカデミアに入る時からエージェントになってからも試験があつて1回でも点数が8割以下だとイチからやり直して、つまりリゲートだって。』

思い出すだけでもおどろおどろしい表情になっちゃうよ。

「ハイ、そんなんです。チーフは、その超難関の試験を、アカデミアに入る時から未だにオールパーフェクトを取り続けているんです。ソレが“伝説のエージェント”たる所以でございます。」

コトバが出なかった。

“オールパーフェクト”……。

「後にも先にもチーフただそうです。」

でしょう……。ねえ…。

いやいや、そんながいるダケでも恐ろしいよ。

「そんなんですから、入庁2年目にはもう幹部候補にオファーが来たそうなんです。」

でしょうねえ。

何もコトバがない。

「でも、“現場がイイ”と、頑として拒否し続けているらしく、bossや他の幹部を悩ませているらしいのですが、今のあのチーフの姿を見てたら解った気がします。」

確かに…。

でも、如月サン、

そう言うアナタも十分嬉しそうだよ。

この2人にはきつと、アタシには分からない“何か”があるんだろうな。

如月サンの表情を見てるアタシまで、笑顔になっちゃうよ。

「エージェントはそれぞれ1人1つ、人より秀でた得意分野を持ちます。当然チーフは1つどころじゃないのですが、中でも一番の得意分野が、エンジニアなんです。だから機械工学科なんですけどね。」

話してる如月サンも、聞いているアタシも自然と笑顔になる。

「初めはチーフがワタクシの担当ってコトが、正直イヤで仕方ありませんでした。“伝説のエージェント”ですから。」

失笑しながら続ける。

「ついてみて実際、クールだしあまり多くを語らないしあり得ないくらいクソ真面目だし。」

ん？グチ！？

でも笑顔だ。

「だけど、ワタクシの得意分野がプログラミングだと知っていいのか、プログラミングに関しては全権を委せてくれて。」

如月サンはずっと神楽サンの方を見たまま。

「妃音様の居場所を、プラチナムマウンテンと妃音様のストーンのシンクロから起きる波動で突き止められるようにプログラミングしたのはワタクシなんです。ワタクシはチーフがデザインしてくれたシステムを元にプログラム化しただけなんです。」

はあああああ。

ちよつとパレレルチックだワ。

若干意味不明。。。

「その時も、“オマエが行ってこい”って言うてくれたんです。“オレはまだやるコトがあるから”と。驚きのあまり、“実験台ですか？”って聞いちゃいました。」

如月サンは照れ笑いしていた。

「チーフがワタクシの為に、自分が行きたかったトコロをワタクシに行かせて下さったのに、ワタクシはチーフの気持ちも知らずに暴走しちゃいましたケドね。今ワタクシはまだエージェントでいられるのはチーフと何より妃音様のお陰です。ワタクシは、ココロのソコからお2人が大好きです。なんておこがましいにも程がありますね。でも、妃音様がいてチーフがいてワタクシがいる。こんな最強な組み合わせは他に無いと思います。」

えっ!?!?・・・

アタシの目をジッと見据えて言うもんだから、

いくらなんでもさすがにドキッとしちゃったよ。

「如月いいい!!」

うおつつつ!!

何とも絶妙なタイミングでの神楽サン。

「ハイいいい!!」

大きく返事して神楽サンのところに駆け出した。

「ソコのタオル、濡らしてきてくれないか。」

「ハイ!」

汗だけで、顔や手は油汚れでところどころ黒く汚れている。

でも、モノ凄くキラキラした表情をしていた。

如月サンも。

「ありがとう。」

うわつつつ!!

ま・・・、眩しい…。

ソレにしても

“「妃音様がいて、チーフがいて、ワタクシがいる。こんな最強な組み合わせ他に無いと思います。」”

なんて、すっかり自分を入れてるトコロがいかにも如月サンだね。

んっっっ？？？

今一瞬、夢で見たお兄様の姿が見えた気がした。
過敏になりすぎて幻覚見ちゃってる？

ヤバイよアタシ…。

でもアタシ的には確かに“あの夢”は衝撃的だった。

今2人のお陰でだいぶ気が紛れてたのに…。

「妃音・・・様？」

『えっ！？』

目の前にいた2人の表情は、どちらも眉間にシワが寄っていた。

「お顔の色が優れないようですが、どうかなさいましたか？」

と神楽サン。

『えっ？』

顔に手を当てる。

手を当てたつてどうしようもないんだけどね…。

「いい加減、仰っていただけませんか？」

またしても神楽サンが迫力のある怖い表情になっている。

『何でもないですって。』

と笑ったが、、

神楽サンどころか、如月サンまで表情が怖くなっていた。

「もうそろそろ限界ですよ？」

如月サンまで・・・。

『家で話します。』

観念するしか、

ないようだ。

アタシと神楽サンは神楽サンの運転する車で、

如月サンは原チャで、それぞれ帰ってきた。

夕飯の準備をしながら話すコトにした。

パパもママもいない、3人での準備だったから。

『アタシがいなくなった後って、後継者問題はどっとなってたの？』

いつの間にか、気が付けば自然とタメ語に変わっていた。

「とにかく妃音様を見つけ出すコトに必死でした。」

と如月サン。

少し沈黙。

『お兄様は？』

「えっ!？」

「えっ!？」

2人同時だった。

『アタシがいなくなったからって、お兄様に継承権が移るってコトはないの?』

「妃音様？」

神妙な面持ちの神楽サン。

「ですから、継承権はプラチナムマウン・・・」

如月サンのコトバの途中で、

『アタシとお兄様みたいに・・・、』

言われなくても分かる説明を、アタシは無意識で遮っていた。

『下のコが継承権を継いだケースって、あるの?』

如月サンは哑然としていたが、神楽サンはいつの間にか淹れてくれていたコーヒ―を差し出しながら、優しく話し始めてくれた。

「我々がアカデミアで受けた講義の中では、数人おられるようです。」

「そりゃそうだよね・・・」。

「琉雅様を、思い出されたんですか？」

神楽サンの問い掛けに、ゆっくり頷いた。

「如月が琉雅様とアカデミアで一緒にしてるよな。」

え、つつつ!!!

お兄様もアカデミアに?????

顔がひきつる。

「皇家の方々も、皇家教育の一貫と致しまして、聴講生として、講義は一緒に受けて頂くコトになっております。ですので、妃音様もお戻りになられましたら、アカデミアで講義を受けて頂きます。」

と神楽サン。

ホッ。

ひと安心。

「なにぶん、“皇家の人間として産まれた”のが大前提としての条件ですから、後継者様が必ずしも皇王様のご子息様とは限りません。皇王様のご兄弟のご子息様が後継者様になられたと言うケースも、過去にはあったようです。」

今度は如月サンが説明してくれた。

心臓を、深く強くえぐられたような気がした。

『そんなにこのストーンは絶対なの？』

思わずストーンを見入ってしまう。

「ハイ。」

神楽サンは物々しく。

「過去に何度となくストーンのお導きに反し、ストーンを授かった方以外が皇王様になったケースがございましたが、その度に解明不可能な天災等が発生したそうでございます。」

如月サンは淡々と。

“解明不可能な天災”…。

ストーンに対して、今まで一度も感じたコトのない威圧感を今、

アタシは初めて肌で感じていた。

masquerade

「他にも、ストーンのパワーを封じようと企てたレジスタニアがマウンテンの怒りに触れ、宇宙の彼方に塵となつて飛ばされてしまつたりと、その力は全くの未知数で、予測も解析も不可能なんです。」

鳥肌が、立っていた。

準備に集中出来るハズもなく。

如月サンは講義を受けた内容を淡々と話すだけといった感じだったけど、

今まで何とも思わなかったペンダントが、

何だか急に物々しく、とてつもなく重く思えてきた。

その後準備を終えて、2人に詳しくアタシの部屋で話すコトになり…。

“夢”のコト、

“声”のコト。

アタシは、自分の想いを改めて考えさせられているような思いを感じながら話していた。

“このストーンを授かった者としての覚悟”

みたいなモノを。

だから自然と、タメ語に変わったのかも知れないな。

「妃音様が失踪されようが、妃音様が次期皇位継承者様には何ら変わりません。マウンテンが導きし御方は、ストーンの御加護によって、必ずご無事でおられると言う確信がございますので。」

この神楽サンのコトバを聞いて、尚更思った。

今、こんなあり得ない事実を知らされても“呪縛”とか、そんなおどろおどろしい感覚は、不思議と無い。

あるのはより強い“覚悟”だけで。

かと言って、今すぐ戻る気は、さらさらない。

つまりは、“皇女”としての覚悟そのものは出来たケド、

“この時代を離れる”覚悟とは、また別のモノなワケで…。

アタシは一晩中、ベランダで星空を眺めていた。

時が経つのもまるで気にせずに。

隣の部屋には神楽サンがいて。

（呼び方はまだ“サン”づけのままのようで。）

如月サンは例のごとく、補習に行っていて。

b o s s にはバレちゃうのかなあ
…

なんて、ちよつとフクザツな思いを抱きながら。

h?

え え え え え
! ? ! ? ! ? ! ? ! ? ! ? ! ?

久々にブレスレットが光ってるううう!!!

咄嗟に隣の部屋の神楽サンを・
・
・

いない
.
.
.

ሥራ ሥራ ሥራ

。・・・ウツヒナ

ってか、なんでいないのよ神楽サ↓↓↓ン!!!!

「妃音様!!!」

来た
つ
つ
つ
→
→
→
→
→

ちよつと涙目になる。

安心と、ちょっとした怒りで。

神楽サンは、動じるコトなく冷静かつ迅速にPPを操作している。

ブレスレットはまだ光ったまま。

PPから出ているモニターはどつやら何かの場所を示しているようだ。

レジスタニア???

“あの時”の記憶が…。

えっ!?!?...

周りの景色が…、

歪んで見え始めている。。。

アタシは無意識で、神楽サンの腕を掴んでいた。

「大丈夫です。」

ちゅど - - - - - ん ← ← ← ← ←

涙腺、崩壊・・・。

号泣したい気持ちを堪えるのに必死。

自然に流れる涙を左手で何度か拭う。

涙の理由は、もちろん神楽サンの“大丈夫です。”による最高潮の安堵感。

こんなに“コトバの力”が強い人も、多分他にはいないだろう…。

なんてコトを悠長に思っている余裕は実は全くなく、さつきより歪みが大きくなっている！

自然と神楽サンの腕を掴む手に力が入ってしまっている。

ちゅど ↓ ↓ ↓ ↓ ↓ ↓ ↓ ↓ ↓ ↓ ん → → → → → → → →

アタシの右手の上に、神楽サンの右手が重なった。

なぜかたったそれだけで、一層アタシの“癒しのツボ”に直撃。

いや、そんなコト言ってる場合じゃないだろさつきから！！

…だけどそのくらいの絶大な安心感があるよ、神楽サンには。

あっ・・・。

歪みが消えた。

光も消えた。

掴んでいた力がフツと弱まる。

「妃音様？」

『歪みが…』

「歪み？」

えっ？

神楽サンの表情…。

どうみても驚いている。

『歪んで、ゝ、ない？』

眉間にシワが寄る。

絶句。

アタシだけが歪んで見えてたっての？

「ワタクシは何も異変は感じませんでした。」

・・・・・・・・……？？？？？

どういうコト！？

「申し訳ありませんが、お話し頂けますか？」

困惑顔の神楽サン。

「如月！！」

話し終わるなり、神楽サンはPPで如月サンを呼び出した。

「ハイ！チーフ！！」

すぐに如月サン登場。

何度見てもこの何Dか分からない立体動画に驚かされる。

「今bossと一緒に？」

神楽サンの顔が強張っている…。

「ハイ。」

おっ！！！！

boss登場。

「お変わりありませんか？姫様。」

bossも、神楽サン程では無いものの、安心感がある。

「boss、たった今姫様のブレスレットが反応致しました。」

神楽サンがささず報告。

「と言っても、ワタクシのモニターには全く反応しなかったんです。」

「何い？？？」

b o s s にも一瞬にして眉間にシワが寄る。

「しかも、妃音様のブレスレットが反応している間、妃音様だけ、見える景色が歪んで見えたそうです。」

「お加減は大丈夫ですか？ここ数日あまり優れないと伺いましたが。」

b o s s がアタシに話し掛けている。

数百年も先の未来にいるハズの b o s s が…、

リアルタイムで。。。

何とも u n b e l i e v a b l e な状態なんだろう…。

ノイズも時差も全くなく。

『お陰さまで。b o s s や神楽サンや如月サンが手配してくれた S M P のお陰です。ありがとうございます。』

「妃音様まで b o s s だなど！…どうか朱雀とお呼び下さい。」

ププ……ッ！

慌ててる b o s s がおかしくて仕方なかった。

思わず吹き出し笑い。

「そのようなお言葉遣いもどうかお止め下さいませ。如月からは聞いておりますが…」

困惑しきりのboss。

『はい!』

笑いながら、わざとらしく伸ばしてみる。

神楽サンはただ、失笑しているだけだった。

「先程のブレスレットが光っていた時と言うのは、ストーンはどのような状態だったのですか？」

あゝ……、そう言えば。。。。

つい神楽サンの顔を見てしまう。

ストーンの状態、、

どうだったっけ…………

ポカンとした顔で神楽サンを見る。

「ワタクシにはストーンも何の異変も見えませんでした。」

ポカンとするアタシの代わりに神楽サンが答えてくれた。

『ごめんなさい。アタシ…、見てませんでした…。』

「そんな！謝らないで下さい。そんな状態の時にこちらこそ不謹慎でした。申し訳ありません。」

ありやりやりや…。

b o s s に謝らせちゃってるよ…。

『b o s s こそそんな…。』

こっちが恐縮しちゃうじゃないのよ！！

「あくまでも仮説ですが、もしストーンが何かしら光るなどしていれば、神楽のモニターがしっかりレジスタニアをサーチしたと思うのです。」

はあ…。

ポカンとするしかなく…。

「ワタクシが妃音様をお迎えに上がった際、何らかの形で防波されて直接妃音様の元へ行けなかったのと同じケースと言うコトでしゅうか。」

見たコトもない程の神妙な表情で如月サンが言った。

「と言うコトはブレスレットが効かないと言うコトになりますが…。」

神楽サンのコトバに、如月サンもb o s s も一層顔つきが陰しくなる。

アタシはたまらず口を開いた。

『アタシが・・・、』

一旦言い掛けて。

ちよつと胸が痛くなつちやつたから。

『早く戻れば済むの?・・・』

本音は、

言いたくなかつた…。

アタシがそんなコト言うのが余程衝撃だったのか、bossも神楽サンも如月サンも、みんな憂慮の表情に一変してしまった。

少しの沈黙も。

沈黙を破ってくれたのは神楽サン。

「いえ妃音様。ご自分を責めるのはお止め下さいませ。レジスタニアを壊滅させられない我々に問題がございます。」

深々とアタマを下げる神楽サンに、bossも如月サンも続いた。

コトバには出さないけど、かなり畏縮…。

「どのみちレジスタニアを壊滅させない限り、妃音様はどこにいて

も狙われます。妃音様が狙われてしまうのは、完全に我々の責任で
ございます。」

b o s s が続けた。

“ドコにいても狙われる”

またしても、考えさせられてしまう。

“自分の立場”を・・・。

懲りずにベランダにいた。

今夜も眠れずに。

最近、あんまり眠れてないな…。

仕方ないけどね。

今まであり得なかった展開が次から次へと起きてるんだから。

精神状態を保っているだけ奇跡だよ。

いつノイローゼとか、精神崩壊してもおかしくなさそうなモノだけ
ど。

コレも、ストーンのお陰なのかな。

ソレと…、

隣の部屋に目を向けた。

“一心不乱”とはまさにこのコトなんだなって状態でPPを操作している、

神楽サンと、

神楽サンよりは遥かに頼りないケド、ムードメーカーの如月サン。

そして、

神楽サンとは違った安心感のboss。

この3人のお陰もあるんだろうな。

ちょっとニヤけちゃったりして…。

側にはいなくても、いつでも側にいてくれるような安定した存在感。

そして何より、

神通力とも言つべき、神憑り的なあの“コトバのチカラ”かな。

脳波にまで刺激されるくらいのチカラ。

アレも解析不能な力の1つだね。

ん・・・？

んん・・・？？？

何の前触れもなく、突然閃いた！！

“ 解析不能 ”

“ プログラミングが得意 ”

“ チーフがデザインしたシステムをプログラミング ”

アタシは神楽サンの元へ急いだ。

ある仮説を抱いて。

『神楽サン！！！』

アタシの勢いに神楽サンは圧倒され気味で。

一瞬だけ、戸惑っていた。

「いかなさいましたか妃音様。」

手が止まる神楽サン。

『例えばの話なんだけど…、』

何故か軽く息を切らして。

『ストーンの力って、与えられた人によって様々なんだよね。』

何故かアタシ、高揚気味。

心なしか後退気味の神楽サン。

「ハイ。」

上がり気味のアタシは尚も続ける。

『与えられた人以外は触れるコトすら出来ないって言ったよね。』

「ハイ。」

アタシ、畳み掛ける。

『だから、解析も不能だって言ったよね。』

「ハイ。」

『神楽サンや如月サンのチカラを持っても?』

「えっ!?!」

神楽サンの表情がふと変わった。

やっと本題。

の前に…。

「妃音様…、お座り下さいませ。何かご用意致しますか?」

表情はビミョーに困惑気味だったケド、態度と口振りは至って冷静な神楽サン。

アタシも深呼吸してテンションを普通に返して返事する。

『コーヒー、飲みたい。』

冷静を装おうと、ほんのりはにかんじゃう。

「一緒に行かれますか？」

笑顔での神楽サンの問い掛けに、間髪入れずに頷く。

さすがに今は1人になりたくないから。

神楽サンもきつとソレを見越してくれたんだな。

そのままキッチンで話し始めた。

『アタシが身につけたままだったら、解析システム作れない？』

また神楽サンの表情がチラッと変わった。

「妃音様？」

どうやらアタシの提案は突飛もなかったようだ。

神楽サンの表情が、ちょっぴり怖かった。

「確かに、妃音様におかれましては歴代の皇王様方の時にはなかった現象が多く見られます。」

と、ココでコーヒー完成。

『頂きます。』

すかさず一口。

「なおかつ、今まではコレと言って守護山でもあるプラチナムマウ

ンテンはおるか、ストーンを解析しよう等と、半ば恐れ多いコトを考えた者すらいなかったでしょう。」

話し方が既に生真面目過ぎる神楽サン。

堅苦し過ぎて、何となく聞いているのが疲れそうになるよ…。

「ですが、妃音様のケースが特殊なのと、妃音様からのご依頼であるコト、そして、先程のコトがワタクシ事ではございますが、どうしても気になりますので、妃音様がそうおっしゃって頂けるのであれば、是非ワタクシからも妃音様にお問い合わせします。」

そう言う神楽サンはアタマを下げた。

“先程のコト”???

『モニターに反応しなかったのとストーンが光らなかったコト?』

「ハイ。」

ソレとストーンの関係性??

全くアタシには理解不能だった。

「ひいては妃音様の歪みにも関わるコトではないかと推測致しますので。」

ますます理解不能。

まあイヤ、神楽サンに任せよう。

「まずシステムをデザインしてから妃音様にご協力頂きます。今夜はとりあえず安心してお休み下さい。」

また神通力だよ!!!

ホントに“フウっ”と肩の力が抜けてくカンジがする。

コレのお陰で、今夜はぐっすり眠れそうだよ。

んつつっ???

ドコだ、ココ…。

真っ白な大地。

だけどかなり荒れ果てて。

赤褐色の空。

この前とは違う。

草木1つ生えてなくて、地面はかなりひび割れてて。

ストーンは???

え っ っ っ ！ ？

うっすら青みがかったる。

何で！？！？！？！？！？

しかも浮いてる。

アレっ？

遠くに人が見える。

誰！？

神楽・・・サン？

ちよつと違うかな。

如月サン？？？

、、、、いや、違うな。

b o s s ？ ？ ． ． ．

でもない。

誰！？

霧なのか何なのか、霞んでハッキリ見えない。

しかも後ろ姿。

・・・・・・・・・・・・・・・・、はつつつつつ！！！！！！！

まさ、か・・・

『お兄様！？』

もちろん後ろ姿だから、幼い頃の面影も何もわからないけど、
とっさに呼んでいた。

するとスッと姿が消えてしまった。

そのままアタシは目を覚ましていた。

カーテンの隙間から陽が射し込んでいる。

どうやら朝まで寝れたようだ。

でも・・・

目覚めのテンションは、サイアク…。

ストーンを見つめて、ちょっぴりふけてみて。

お兄様・・・。

何で最近お兄様がやたら離れないんだろう。

そりゃあんなん見ちゃったら仕方ないか…。

衝撃的だったからね。

・・・・・・

後継者になれない自分が、後継者のいない間すらも何も出来ない…。

お兄様はどんな御気持ちなんだろうか。

ダメダメ!!

また離れなくなっちゃうよ!?

気を取り直して下に降りよう!!

・・・ん?

今日は吐き気?

ごく軽いモノだけど。

またストレス性かな。

そりゃ次から次へとおかしくもなるか。

吐き気だから今度こそSMPで治るでしょ。

隣にまだ神楽サンいるかなあ。。。

部屋のドアをノックしてみる。

・・・無反応。

もう下に降りてるのかな。

下に行ったらお願いしよつと。

はあああああ!!!!!!!!!!!!!!!!!!

イッキに血の気が引いた。

なぜなら、、

ふと目にしたストーンが、

うつすら青みがかったままだったから…。

アレは夢じゃなかったの???

いや、夢だよね…。

じゃあどうして!?

ダメだアタシ…。

完全にキャパオーバーだ・・・。

どうしよう…。

下に降りれない…。

！！！！

また吐き気だ。

すぐには治まるのだけど。

無理！！！！

もう無理！！！！

とは言え、だからと言ってどうにかなる問題でもない…。

じゃあどうすんのよ。

だからどうにも出来ないんだってば → → → → →

ぼんやり光ってる。

アタシ・モウゲンカイ、、、デス。。

シヨリ・シキレマセン・・・・・・・・

「妃音様！?!?!?!」

えつつつ???

目の前に神楽サンがいた。

何で？

いつの間に?????

キツネにつままれたみたいな、半ばオマヌケな顔で神楽サンを見る。

「妃音様の発する波動があまりにも強すぎて、ブレスレットが反応致しましたので。」

あっ…

階段をモノ凄いいスピードで駆け上がってくる音がするよ？…。

もしかして…。

「妃音様！！！！」

案の定、如月サンも血相変えてやって来た。

「ブレスレットが異常に反応しましたがどうかなさいましたか！？」

…神楽サン…、如月サン…。

2人があまりにも心配そうな顔してるから、ごくごく自然に涙が出てきちゃったよ。

うつむいて涙を拭う。

「妃音様??」

「妃音様!？」

2人の声が重なる。

『ありがとう、2人とも。それと、ごめんなさい。』

泣き笑いで。

2人のこんな哀しそうな顔、見たくなかった。

“「妃音様がいてチーフがいてワタクシがいる。こんな最強の組み合わせ、他に無いと思います。」”

不意にあの時の如月サンのコトバが浮かんた。

聞いた時は

“何言っちゃってんの!?”

なんてバカにしちゃってたけど、

今は思える。

“ホントにそうかも”

って。

凸凹コンビの様でいて、

実は誰よりもお互いのコトを理解していて、

なおかつ実は気が合って。

こんな2人に護られたら、そりゃ最強かもね。

そう思ったらなんだかまた泣けてきた。

『ご飯準備行けてなくてごめんなさい。2人とも大丈夫？』

涙をグツと拭いて。

「ハイ妃音様。ご安心下さいませ。ちょうど一段落致しました。」

如月サンの笑顔がやたらと優しく見えた。

「申し訳ありません。ワタクシはちょっとRCSに行っておりまして。」

えっ!？

ってコトは？

『如月サン1人でやってくれてたの!？』

思わずすつとんきょうな声をあげてしまった。

「ハイ。でもまだ下ごしらえですから。」

如月サンは純粋な笑顔で言ってくれた。

ありゃりゃ…。

『ごめんなさい…。じゃ続きやろっ。』

とびきりの笑顔で立ち上がった。

「ですが…。」

「妃音様!!」

2人同時に止められた…。

『ヘンな夢見ちゃったの!!さすがに夢の内容までは言う必要ないよね!?!』

アタシのコトバに2人ともぐうの音も出なくなったようで、渋々ではあるけれどわかってくれたみたいだ。

さすがに夢の内容までは、いくらなんでも話す必要ないでしょ。

「妃音様。」

何事も無かったかのようにその後は過ぎ、何事もないままいつものように学校へ向かった。

ストーンも、手も、青みがかったままで…。

パパママはもちろん、神楽サンにも如月サンにも、突っ込まれない……。

度々アタシが意識して右手に目をやっちゃうコトに対しては、ママや神楽サンとかに尋ねられるけど。

2人には見えてないのかなあ。

コレは言わなきゃいけないよなあ……、きつと。

えっ????????????????????

駅に向かう途中だった。

また、周りの景色が歪み始めた。

えっ!!!!!!!!!!!!!!!!!!?

神楽サン?

如月サン????

2人だけじゃなかった。

周りの動きがフリーズしていた。

あゝあゝあゝあゝ→←→←→←→←→←→←

ブレスレットが光ってる!!!!!!!!!!!!!!!!!!

しかもこの光。

……南山サンの、“あの時”と同じ。

一気に心拍数が激しく上がる。

アタマに血が上ってるのがわかる。

「妃音様！」

ドキ↓↓↓↓↓↓↓↓↓↓↓ン→→→→→→→→→→

ドスすら感じる、地を這うような迫力の低い声。

胸が焼けそうな程に熱くなってる。

一気にアタマに血が上ってるのがわかる。

心拍数もMAX。

神楽サ↓↓↓ン！

如月サ↓↓↓ン！！

何してんのよおお→→→

そんなトコで突っ立ってないで早く助けてよ！！！！

いつもなら

”妃音様つつつ！！”

って言うてすっ飛んで来てくれるじゃないのよ！

はつつつつつつつ！！！！！！

そうだ！boss！！！！

bossにならPPで呼べ、、、、

ない………よ？

PPが、、、、、、

効か、ゝ、ないいいいいい。

うそおおおおおおおん ←
←
←
←
←
←
←
←
←
←
←
←
←
←
←

心の中で叫ぶ。

!!
!!
!!
!!
!!
!!
!!
!!

右手の光が強くなり、大きな球のような形になってきた。「妃音様、お迎えに参りました。」

目の前に現れたのは、“あの格好”をした集団だった。

レジスタニアだ、間違いなく。

“お迎えに参りました。” って????

”消される“ !!!!!!!

“何で？” ってもおかしいけど、

言いたくなるよ。

周りの風景が動いてるし、

如月サンも神楽サンもちゃんと目の前にいるし。

2人とも、朝みたいな情けない顔して。

こんな2人の顔見ちゃったら…、

「妃音!？」

「妃音!?!?!?!」

その場にへたり込んで、

泣きじゃくってしまっていた、

人目もはばからず…。

近くの公園に移動し、一息つくことにした。

如月サンには、乃亜に心配させないようにと、とりあえず乃亜と登校してもらうコトにして。

今ここには神楽サンと2人。

途中、右手を何度となく無意識的に見てしまう。

恐らくそれに気付いてるであろう神楽サンが何も言わないのが逆に怖い。

「高等部特進科2年の神崎如月と神崎妃音・並びに大学部機械工学科4年の神崎神楽、欠席申請御願います。」

神楽サンが学院に連絡してくれてる声だけが響く。

それ以外は、家に着くまでずっと無言だった。

手の光は消えていた。

それでもやっぱり無意識に何度となく見てしまっていた。

何と出来過ぎた偶然なコトに、幸いにもパパもママももう出掛けていた。

良かったあ…。

こんな時間に帰って来たなんて、ママに心配かけちゃうもんね。

安堵の大きな深いため息をつく。

「妃音様？」

じてしまう迫力は…。

『はい…。』

意味もなく敬語に戻っちゃうじゃないのよ。。。

「ご承諾頂きまして、大変恐縮でございます。感謝致します。」

深々とアタマを下げて。

何も言い返せなかった。

複雑な気持ちに襲われちゃって。

今までこんなに自分のコトを人に話さなきゃいけないコトなんて、3歳の“あの日”だけだったから…。

それと、

“アタシに起きてる出来事”なのに、

自分の意思とは全く無関係のトコロで、こんなにも周りの人を巻き込むコトに対しての困惑で…。

とりあえず着替えよう。

『着替えたい…。』

ぼんやり気味にそう告げながら部屋に向かった。

脳みそ、かなり溶けてそうだな。

ってか、むしろ入ってるかなあ。

全部溶けて流れ出てんじゃないだろうか。

部屋に入った瞬間、ドツと急激に猛烈なまでの疲労に襲われた。

それでも無意識に右手に目が行ってしまっ。

ぼんやりとした熱さ。

未だに光ってる。

ストーンも光ってる。

“着替える”とは言ったモノの、ドアの前で立ち止まり、その場に座り込んでしまっていた。

クローゼットまでわずか数歩なのに…。

座り込んだアタシは、“無感情”に近い状態で、ただジツと、ストーンを見つめていた。

アタマの中は、さっきのコトが離れずに。

なぜなのか、涙がこみ上げてきた。

完全にキャパオーバーなんだな、きつと。

光る右手の手のひらに、同じ光を放ったままのストーンを乗せて、
右手をただただ見つめる。

こぼれる涙を時折左手で拭いながら。

着替えよう！

気合いを入れて、立ち上がる。

着替えてる間も心はここに在らずだった。

涙は溢れて来たら頬を伝う程度しか流れてなかったケド、

何も考えられなくて。

ドアをノックする音。

神楽サンだね、きっと。

「神楽デス。よろしいでしょうか。」

瞬殺だった。

“神楽デス”の“かぐ”あたりでアタシの涙腺と理性は崩壊した。

『どつぞ。』

涙声の返事に反応してなのか、神楽サンは慌てた様子で入ってきた。
精一杯涙を堪えてる表情が神楽サンにバレて、神楽サンは手に持つ

ていたコーヒーの乗ったトレイをミニテーブルの上に置いた。

「どうなさいましたか？」

って、鬼気迫る表情で言いながら。

アタシはたまらなく我慢出来なくなって、何も考えるコトなく神楽サンに抱きついてしまっていた。

無感情な状態なアタシに、特別、“照れ”とか、“驚き”とか、もちろんなく。

ごくごく自然だった。

「妃音様??？」

神楽サンの声は、心なしか震え気味なようだった。

神楽サンの声を聴けば聴く程涙がこぼれる。

「妃音様？」

優しい、温かいいつもの神楽サンの声。

止まらない涙をどうにかコントロールしながらゆっくり口にした。

『ごめんなさい。でも、もうちょっとこのままでもいいさせて下さい。』

呼吸を整えながら、ゆっくりと、大きく深呼吸しながら。

B a d a g a i n

静まり返った室内に、如月サンが帰ってきた音だけが響く。

ゆっくり顔を上げて、うつむいたままで涙を拭った。

スツと目の前に白いシート状のモノが現れた。

「ひんやりします。」

神楽サンの説明はただそれだけで。

うつむいたままでそれを受け取る。

持った感じはそんな感じしないけど？

階段を上ってる如月サンの足音をちょっぴり意識しながら、半信半疑で顔に当ててみる。

ノックの音と、アタシの驚きの声はほぼ同時だった。

顔に当てたとたん、泣きはらした目周りダケが、スーッとひんやりしたから。

思わず声をあげちゃったよ。

「妃音様!？」

アタシの声に驚いて、ドア越しの如月サンの声もまた、驚いていた。

『何でもない！どうぞ。』

シートを当てたままでドアに向かって叫んだ。

「失礼致します！」

如月サンが入ってきてても、アタシはシートを外せないでいた。

気持ち良さ、尋常じゃないんだもん！！

「ご苦勞様、如月。」

優しいな神楽サン。

「乃亜様は無事に校舎内まで見届けて参りました。」

『ありがとう。』

シートを当てたままで。

「着替えて参ります。」

如月サンは部屋を出て行った。

「コーヒー、いかがですか？」

穏やかな空気が流れる。

「頂きます。」

顔から少しシートを離してコーヒを一口。

「やっぱりおいしい！」

思わず笑顔になってしまう。

神楽サンは少し失笑気味にフツと笑った。

「やはり妃音様には笑っていて頂かないと。」

い　あ　あ　あ　あ　あ　あ
↓ ↓ ↓ ↓ ↓ ↓ ↓ ↓
！　！　！　！　！　！　！　！

急激的に顔から火が出そう。

解
つ
て
る
！

解
つ
て
る
よ
!!
!!
!!

あくまでも “ お仕えしている ” 立場で言ってるって。

解ってます!!! ってば!!!

だからこそ止めて欲しい！！

こういうコト、てんで言われなれないから誤解しちゃうじゃないのよ。

今ドキドキしてるよ。

「失礼致します。」

如月サンが着替えて現れた。

「オレも着替えて、オマエの分のコーヒーも淹れてくる。」

ぶつきらばつにすら感じられる言い方で、神楽サンはスツと立ち上がり、部屋を出て行った。

「ありがとうございます！」

嬉しそうな如月サンの声。

「チーフのコーヒー、RCSでもメチャクチャ評判なんです。」

本当に嬉しそうなのが、表情で解る。

『そうなの？だって、2世紀も未来でもこういうやり方なの？』

アタシの勝手なイメージが安直過ぎるだけなのだろうか…。

アタシのイメージだと未来って、なんでもオートマチックな気がするんだけど…。

妄想がアタシの脳内を駆け巡る。

「我々のハウスキーパーの講習と同様、なんでもかんでも技術の進

歩ダケが優れているとは限りません。何百年経っても、いつの時代も温故知新なんです。」

“温故知新”…かあ。。。

解つてはいても、言われると物凄く複雑…。

“何百年経っても”とか、“いつの時代も”とか、何とも思わなかったのに。

“故きを温めて新しきを知る”か。

まあ、イイコトには変わらないからいつか！。

「失礼致します。」

神楽サンの声だ。

如月サンがすかさずドアを開けに迎う。

その前に颯爽とドアを開けて入室してきちゃった神楽サンの手にしていたトレイを如月サンが受け取る。

「ありがとう。」

神楽サンも如月サンも、何とまあスマートなんでしょう。

動きに微塵のムダも見受けられない。

どれだけハイパーな教育を受けんだろう、エージェントって…。

ちよっぴり身震い。

神楽サンは、神のような”カユイトコロに手が届くオトコ”だ。

すでに飲んでいるアタシや神楽サン自身のお代わりも持ってきてくれた。

3人で一息つく。

「やっぱりチーフのコーヒーは絶品ですね!」

「当然だ。」

ぷつつつ!

へんな2人。

神楽サンも如月サンもそれ以外は
黙ったまま。

何も言わずにただコーヒーを口にして。

如月サンのPPのモニター越しにbossもいて。

自分から言えって????

何から言えばイイのよ。

聞いてきてくれた方がよっぽどイイよ。

アタシ自身、どこから話せばいいのかワケ解んないし。

…あゝっ！

大きく深呼吸して切り出した。

『昨夜、夢の中で、ストーンが青っぱく光ってたの。』

ゆっくり、静かめに話し始めた。

3人（boss含む）は黙ったまま。

『そしたら、朝目が醒めてもストーンは夢の中と同じ様に光ったままで。』

言いながらストーンと右手に目をやる。

神楽サンの表情も、如月サンの表情も、bossの表情も見えてないけど、何となく引きつってるような雰囲気。

『朝、部屋で叫んだのはそのせい。自分で收拾がつかなくなっ。』

「そうでしたか。」

完全に凹んでる口調の神楽サン。

また沈黙。

『実は…、今もまだ光ってるの。』

「えっ！」

「えっ??」

声を上げたのは如月サンとboss。

神楽サンは無言で。

またしても沈黙が流れる。

「それ以外にも、御座いますよね。」

ゆっくり、静かな口調だった。

「チーフ？」

「神楽!？」

bossも如月サンも啞然としている。

やっぱりこの人には適わないな。

ってか、あんだけ泣きじゃくったら、そりゃ神楽サンじゃなくなっただけ何かしら異変に気付くか。

アタシに驚きも躊躇いも戸惑いも、なかった。

神楽サンの反応は、大方の予想通りだ。

『しかも、その時に、右手に熱さを感じたと思ったら、、、』

最後まで言っただけでなく、

ものすごい張り詰めきった空気に変わってるのがカラダで感じた。

アタシは再度大きく深呼吸して、コーヒーを一口飲んで話し始めた。

『さっき、通学途中に、突然視界が歪みだして…、』

更に空気が凍り付いてる気がする。

今にもピキピキ言っちゃいそうなくらい。

この空気に緊張しちゃうよ。

またコーヒーを一口。

3人は終始無言。

『周りの人達がみんな、フリーズしちゃって。』

3人の顔を1人1人見ながら話す。

如月サンはまるで物の怪にでも睨まれてるかってくらいのひきつきった顔。

『そしたら聞き覚えのない声でアタシを呼ぶ声が出て。必死に神楽サンと如月サンを呼んだんだけど、全然ダメで。』

モニター越しのbossは眉間のシワがマックスで。

『じゃあbossに！と思って、PPをいじったけど全く動かなくて。』

如月サンやbossとは

まるつきり反対の、“無”の表情なのは神楽サン。

『そのうちに、まるでアタシの感情を表すかのように右手の光が球のようにどんどん大きくなってきて。』

何かを感じたらしく、神楽サンが自分のPPを操作し出した。

『そしたら、レジスタニアが現れて、“お迎えに参りました”って言われて。言い知れない恐怖に、声に出して叫んだら、光の球が直視出来ない程の閃光を放って。目を開けたら周りの景色が動き出して、神楽サンがやっと声を掛けてくれて。』

絶句の如月サン。

bossもPPを操作し出す。

「神楽！」

「かしこまりました！」

えっ？

2人のやりとりに、アタシと如月サンは啞然。

何今の・・・。

“「神楽！」「かしこまりました！」”

って、

何がかしこまったっての？

啞然とするアタシと如月サンを尻目に、ポーカーフェイスでPPを操作し続ける神楽サンとboss。

「お話するに耐えないであろうコトまで事細かにお伝え下さいまして、誠に恐縮です。」

深々とアタマを下げるboss。

「ワタクシはコレにて失礼致します。」

モニターからbossの姿が消えた。

何か、アタシの知らないところで、恐ろしく話が進んでる感、爆裂…。

無意識に如月サンと顔を見合わせて、お互いにクビを傾げる。

啞然とするアタシと如月サンに対して、話し始めてくれた。

「実は、数日前からプラチナムマウンテンが度々光を放つと言う現象が御座いまして。」

「あっ！！」

反応する如月サンに、

尋常じゃない勢いで鳥肌が立って、

コトバを失うアタシ…。

何となく読めて来たよ？

・・・、もしかして???

「あくまでも仮説ではございますが、妃音様のストーンの異変と、マウンテンの異変が何らかの形でシンクロしてるのではないかとb o s s とワタクシで推測致しまして。」

まさかその意志表示がさっきの“アレ”???

“「神楽!」「かしこまりました!」”

って、わずか2人合計10文字足らずの短い会話に全てが込められてるっての?????

……………。

益々啞然…。

「チーフが妃音様の居場所を突き止めた時と同じってコトですか？」
ハッとして尋ねる如月サン。

「その通りだ。」

えっ？

2人のやりとりにもまた、啞然としてしまふ。

「bossからマウンテンの異変を聞いた際、そのコトを思い出し、妃音様にも何かしら起きるのではと言う確信に程近い推測が浮かびまして。」

プラチナムマウンテンに異変・・・。

「よっぽど妃音様はマウンテンに導かれし御方なのですね。」

ひどく感心してる様子の如月サン。

『時空を超えちゃってるって言う、異端児だからなんじゃないの？』

自分で言うのもなんですが…。

「もしそうであっても、妃音様程の御方は類を見ません。」

ド真面目に神楽サン。

アタシは自然とストーンに目が行っていた。

「そもそも、妃音様をこの時代に導いたのもストーンですからね。」

何とも穏やかな神楽サンの語り口に、

自然と納得していた。

そうだよ、考えてみたら。。。

正真正銘、“守護石”なんだよね…。

“あなたにとって、命と同じくらい大切なモノ”

お母様のコトバが否応なく浮かぶ。

もちろん“後継者”だからこそその現象なんだろうけど、

アタシが“後継者”じゃなかったら経験“しなくていい”コトなんだろうけど、

それでもストーンには最上級の感謝。

アタシの何が、ストーンに“導かれた”理由かはもちろんわかんない。

けど、

恥じないように、

アタシらしくいよう。

きつと、

ホントなら、

今のアタシには、

そんなコト想う余裕なんて、

どこにもないんだと思う。

だけど、それでもこんなにも強く感じられるのも、

きつとストーンのお陰なんだね。

この想いをずっと黙ったまま聞いていた神楽サンと如月サンは、ただ満面の笑顔で、頷いてくれていた。

この2人のお陰もあるのかな、、、少しは。

まだ明るい時間の空なんて、今までこんなにもゆっくり見るコトなんて、なかったな。

ベランダで青空にストーンをかざしながら、色んなコトを想いめぐらしている。

このストーンの意味

を、強く強く意識ながら。

隣の部屋では神楽が“例のシステム”をデザインして、如月がプログラミング中。

さつき、また一層“後継者”としての“自覚”みたいなモノを認識したからなのか、

自然と、神楽と如月を呼ぶのに“サン”が消えていた。

ホントに、全くの自然な流れだった。

何の違和感も持たずに“神楽”“如月”呼ばわりしている自分にビツクリした程度で。

2人は心なしか、嬉しそうな表情に見えた。

応える返事も、どこかしら嬉々としているような風に聞こえて。

でもやっぱり、依然として、

“戻る覚悟”は、

まだまだないな。

ソレとこれとは、別だよ。

ってか、今現在の状態が、ギリギリの限界ラインなんだと思う。

まだ、きっと、“後継者としての覚悟”は、完全なモノじゃないと思う。

依然消えない右手の光。

きっとコレも、何かしらの力なんだよね、

アタシ特有の。

“アタシ特有”

・・・かぁ。。。。

“アタシ”*****って、、

神崎妃音？

それとも、

琉按妃音？

どっちにしても、アタシはアタシなハズ…。

だけど、

思う。

琉按妃音までのリミットは、

確実に、

一歩ずつ、

いや、もしかしたら急ぎ足で、

近づいてきている。

アタシの意思とは全く無関係に。

「妃音様。」

ベランダに如月が現れた。

返事が弱々しくなってしまう。

振り返って見た如月は、メチャクチャ笑顔だった。

「ピアノ、聴かせて頂けませんか？」

えっ?????

ちよつと躊躇しちゃう。

でも、屈託のない、無邪気にも見える如月の顔を見ていたら、自然と頷いていた。

如月にも神楽程じゃないけど、安心感があるな。

やっぱりそうだよな。

神楽に対してのドキドキは、決して神楽個人に対してのドキドキじゃないんだ。

コレで確信出来たよ。

“ やつと妃音が楽しそうに笑ってくれた ”

あの時の言葉がそのまんま蘇る。

神楽も如月も、きっとアタシは“ 後継者・妃音様 ” としてしか見れないんだよね。

それ以外の何者でもないんだ。

だったらアタシだって、神楽と如月のコトは、“ 自分に仕えるエージェント（時々アニキ） ” としてだけ見てればいいんだよね。

難しいケド・・・。

如月は神楽とは違い、楽器は苦手らしく、アタシが弾いてるだけだった。

だけどビックリしたのが、

歌がハンパなく上手い！！！！

声がイイんだ、また。

アタシがチラッと歌ったらすぐ覚えて歌ったんだけど。

アタシのピアノに、神楽のギター、加えて如月の歌。

立派なユニットが出来ちゃうじゃない！！！！

音楽一家の神崎家に相応しいよ。

もしかしてこの2人がアタシのエージェントなのって、ただの偶然なんかじゃなく、出来上がった必然？？

お兄様の声。

今度は視界じゃなくて、音が歪んでる。

音って言っても、ホントなら無音のハズなのに。

ストーンは????????????

今度こそストーンの状態を見ないと。

????????????????????

黒??????????

黒って何???

直感だけど、

黒ってコトは、

良くない暗示っぽくない?

でも、お兄様だよ?

お兄様じゃないの???

『神楽ああ!如月いい!!!!』

全力で叫ぶ。

「呼んでも無断だよ、妃音。」

!?!?!?!?!?!?!?

声がヤケにリアルに、クリアーに聞こえる。

やっぱりこの前と同じ、お兄様の声だ。

ドコつつつ!?

いくら辺りを見渡しても、お兄様どころか誰の姿も見えない。

ストーンは黒のまま。

ブレスレットは…

黒iiiiiii!?!?

ダメだ、bossに→→→→→

ゝゝゝ…使えないiii↓↓↓

再び。。。

気失いそう×××××

「妃音はずっとココにいてイイからね。」

また声だけ。

はあつつつ!!!

閃光みたいなモーレツな勢いで鳥肌が立った。

思い出した、この声!!

南山サンに襲われた時・

今朝の“あの事件”の時。

全部同じ、この声だったよ????

『お兄様?』

声の限り叫んだ。

すると、音の歪みが消えて、ストーンの色も元に戻った。

カラダが急にフワツと軽くなった気がした。

「お待たせ致しました!・・・、妃音様???」

まるで魂が抜けたかの如くに茫然自失のアタシに、如月と神楽は血相を変えてすっ飛んできた。

アタシは泣くコトも、怒るコトも、笑うコトも出来ずに、
ホントに魂が抜けたみたいな状態でいるしか無かった。

“ 妃音はずっとココにいてイイからね ”

どういうコト？

それと、

お兄様の声がすると、どうしてストーンが黒くなったり、レジスタ
ニアが現れたり、異変が起きたりするの？

胸騒ぎがして仕方無かった。

ホントにあの声はお兄様なの？

” お兄様 ” って叫んだら歪みが消えたってコトは、やっぱりお兄様
で間違いはないんだよね…。

だとしたら・・・。

アタシのアタマの中には、思いもしたくないけどそう思えば辻褄が合ってしまう、とんでもない仮説が浮かんでしまっていた。

いくら否定したくても出来ない事実と共に…。

でも誰に言える？

神楽？？

如月？？？？？

言えないよ！

自分の実の兄だよ？

神楽や如月にとっては仕えるに値してしまう存在だよ？？

言えるワケないよ。

いくら否定する要素がないとは言え仮説にしか過ぎないし…。

じゃあ誰がいる？

お父様？お母様？？お祖父様？？？お祖母様？？？？

バカ言わないでよ！！！！

誰が10年以上離れてた人間の言うコトなんか信じるのよ！！！！！！

ましてやずっとそばにいたお兄様のコトを…。

b o s s ! ?

R S C の最高責任者。。。

アタシを捜し続けてくれたRSCのトップ。

大丈夫かなあ…。

なんの根拠もなかったけど、何となく確信出来た。

“bossになら言える”

って……

それともう1つ、コレも違う意味で何の根拠もない仮説、と言うか期待。

“もしかしたらbossもそう思ってたんじゃないかな”なんて。

何も言わず、じっとアタシのコトをただ見てる如月と神楽。

“bossと話がしたい。1人にしてくれないかな。”

やっと口を開いたアタシの発言に躊躇いながらも、2人とも何も言わず部屋を出ていつてくれた。

「かしこまりました。bossを呼びますね。」

って、ちょっと憂いを感じちゃうようなビミョーな表情で神樂が去り際に言ってくれただけで。

2人の背中に心の中で“ごめんね”って呟いた。

「お待たせ致しました妃音様。」

速つつつ!!!

音速？

光速？？

200年も未来だなんて、誰が信じるってのよ、この速さ。

“時差”ってモンがないワケ??????

いや、どーだってイイか、そんなコト。

『忙しいトコロごめんなさい。』

ちよっと潮らしく。

「滅相も御座いけません。妃音様の御用でしたら優先させて頂きます。」

・・・“後継者だから”だね…。

表情が曇る。

大きく深く深呼吸して。

『誰にも聞かれないようにしてもらえる？』

「承知致しました。」

穏やかな笑顔のboss。

『如月や神楽にもまだ知られたくないの。』

bossの目をジッと見て。

「かしこまりました。仰せの通りに致します。」

『ありがとう。』

先回りはコレでOK！

神楽が置いていってくれたカフェオレを一口飲んで切り出した。

コレまで話した何度かの異変の時に、必ずお兄様の声がしたコト。

しかもその後レジスタニアが現れたコト。

そして、

さっきのコト。。。。

b o s sはずっと何も言わずに黙って聞き続けてくれた。

そして最後に、アタシはとんでもない発言をした。

『あくまでも仮説なんだけど…』

コトバに詰まる。

静寂が流れてしまう。

ストーンと手のひらの光を見つめて。

再び深く深呼吸。

意を決して言おうとした瞬間、b o s sの口から衝撃的な発言が飛び出した。

「琉雅様のコトでございますか？」

目玉も心臓も、飛び出しそうな程に、驚いた。

かなりすつとんきょうな顔でb o s sを直視していた。

「ご安心下さいませ妃音様。」

へっ???

何が??

すつとんきような顔、継続中。

「神楽も申しております、ワタクシと神楽で超極秘に調査中でございます。」

えつつつつ???

淡々とbossは言うケド・・・

“だから何が??”

アタシの表情は、100%そう言っていたようで、

「神楽が“琉雅様とレジスタニアが何かしら関係があるのではないか”と申してきました。聞いた時は言語道断でしたが、神楽がむやみやたらにそんな大それたコトを言い出すヤツじゃないとは思いません。」

フツと失笑するboss。

「とは申しまして、もしソレが我々の勘違いだったとしたら大問題ですので、あくまでもワタクシと神楽ダケの完全シークレット事案として秘密裏に進めていたトコロでした。」

神楽・・・。

不思議と涙が込み上げてきた。

ゴメンナサイ…。

神楽の顔が浮かぶ。

でも、尚更考えてしまっ。

『当たり前のコト、だけど、』

力無く問い出す。

『みんな、アタシが後継者だからやってくれてるんだよね？』

わかってるよ、馬鹿馬鹿し過ぎる質問だってコトくらい。

ヒクヒクし出す。

恥ずかしさとかは、まるでなかった。

さつきからそのまま継続の、“驚き”しかなくて。

アタシが???????

尊敬?????????

何で?????????

「ワタクシが存じ上げる皇家の方々の中でも、妃音様程の御方は居られません。」

いやいや、全く以て、ワケが分かんない。

だって、ドコが????

アタシのドコが尊敬される?????????

しかも出逢って何日?????????

『ウソ言わないで。』

真顔で。

「ウソ偽りは申しておりません。神楽はモチロン、如月も、常に申しております。」

満面の笑顔のboss。

その笑顔に、偽りは感じられない。

尚更、理解不能だワ…。

bossは、ただただ微笑んでいる。

「妃音様ほどお人柄が顕著に表れる御方はワタクシは今まで出逢つたコトが御座いません。」

いやいや、bossこそ僅か数日で何を…。

うつすら疑いの眼差し。

「そもそも、プラチナムマウンテンに導かれし御方である時点です
レだけの御方であるコトに違いありませんし、神楽も如月も、これ
ほどにストーンとシンクロなされる御方にお仕え出来るコト自体、
誇れるコトだと感じているのだと存じます。」

$\bullet$

またしてもストーンに目をやる。

確かに神楽、言ってた。

だけど、

『全然わかんないよ。』

まだうつすらと声がかすれる。

「それが妃音様らしさなのではないでしょうか。ワタクシごときが申し上げるにはおこがまし過ぎるコトとは存じますが。」

“アタシらしさ”…。

ちよつと胸に刺さる。

「妃音様は、妃音様なんですよ。」

えっ???

b o s s の声が、顔が神がかつてゐる気が…。

「神崎妃音様であられようが、琉按妃音様であられようが、我々はモチロン、どちらの御家族様に取りましても、妃音様にはお変わりありません。」

今のb o s s のコトバ、

豪速球直球ド真ん中にアタシのココロを貫いた。

アタシの意思とは関係なく、自然と涙が溢れ出ていた。

声が出せない位に感極まるアタシを、

b o s sは何も言わずにただただその場に居てくれた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4360t/>

starlight symphony

2011年11月19日15時42分発行